

「ラ・カリカチュール」とはどんな新聞か（2 / 2）

宮原 信

一般科

A description of *La Caricature*

Makoto MIYAHARA

Abstract

The following pages constitute the second half of 《A description of *La Caricature* 》, the first half having appeared in the last number of the same proceedings. As it was announced, we examine now the text parts of the journal and the various satiric strategies adopted in the journal.

前号（1 / 2）の内容：

はじめに

I. 刊行時期、体裁、刊行責任者など

II. だれが読んだか、眺めたか

III. 口絵、サブタイトル

IV. カリカチュール紙の石版画

V. 石版画を中心として見たカリカチュール

紙の風刺の対象、方法などの変遷

1) 最初期 2) 初期 3) 中期 4) 後期

(注)

今回（2 / 2）の内容

VI. カリカチュール紙の文章 =

各時期における特色、紙面構成

1) 最初期 2) 初期 3) 中期 4) 後期

VII. カリカチュール紙の風刺の対象

と手段

VIII. カリカチュール紙の廃刊

終わりに

(注)

VI. カリカチュール紙の文章＝各時期における特色、紙面構成

IV. と V. で我々は、カリカチュール紙を主として石版面の面から眺め、その変遷を追ってきた。では、大判紙を二つ折りにした4ページの紙面には、どんな文章が載っていたのだろうか。その風刺の対象は？用いられている技法に、何か特色があるのだろうか？読者達は何を求め、何を期待していたのだろうか？以下で我々はまず、石版画について我々が設けた時期の区別を踏襲しながら¹⁾、それぞれの時期の紙面構成を見ると同時に、具体的に、いくつかの文章を見ていきたいと思う。

1) 最初期（～1830年末、31年初め頃：社会風俗の風刺が、主としてバルザックによって行われた時期）

もっと後の時期のカリカチュール紙の文章を知っている者の目には、創刊後2、3ヶ月の間、毎週読者に提供された文章は、なにか別の種類の新聞のものであるように映るに違いない。新聞の文章と言うよりは、短編集の中的一篇といった印象を与える創刊号冒頭の文章、「大司教」(L'Archevêque) は、少なくともテーマ自体が、王政復古期を通じて王権と結びついていた宗教界を、とりわけ七月革命に際しては民衆の怒りを買ひ、当時姿を隠していたパリ大司教を想起させるため、まだ政治的な風刺新聞出発の文章としても理解できるが、第2号（1830年11月11日）の、これまた冒頭の文章「診察」(La Consultation) はどうだろうか。そこでは、相手の社会的身分によってまったく態度が変わってしまう一人の町医者診療風景が、並んで置かれた二つの場面を通して描かれる。初めの場面では、新興貴族階級の邸迄、女主人の診察に出向いた医師が、患者の

つまらぬ訴えにもいちいち答え、1時間ほどを費やす。次の場面では、無料診療日ということで大挙してやってきた患者達の訴えに対する、同じ医師のそっけない、残酷な受け答えが羅列される。

「... (続いて別の患者に) 『さてと、ご婦人、あなたはなんでいらっしゃいましたかな?』 - 『あい変わらず硬性癌(squire)のことでして、先生...』 - 『入院しなくちゃ...』 - 『そんな...先生...子供達が...』 - 『別に、あなたが居なくなつて...あなたが死んじゃえば、いやでもそうなるんだから』女は泣く...」

創刊号に戻って、今度は、「スケッチ」(Croquis)という欄に置かれた文章「隣人達」(Les Voisins)を見てみよう。そこでは不倫の愛が、パリという都会のいわば一情景であるかのように描かれている。

ある若い家庭思いの女性が、夫が勤めに出ている間、刺繍をしたり、物語を読んだりしながら、自分のアパートマンの窓から、通りひとつを挟んだ向こう側のアパートマンで、いつも仲睦まじく生活している若い夫婦の様子を見て、その清純な愛の姿に好感を持っている。ある日彼女は、『お向かいに住む、黒髪の、魅力的な若奥さんと近付きになりたい』と夫に相談する。夫は、『おあいご用だ。旦那さんの方とは毎日株式取引所で顔を合わせている。きさくないいい男だ。夕食に招待しよう』と同意する。やがてその晩、連れだってやって来た隣人夫婦の夫の方は、今まで見たこともない、ずんぐりした、あばた面の初老の男だった。

政治的問題や政治家達でなく、いわゆる社会風俗を風刺の対象としてとりあげたこのような文章は、同じ時期のカリカチュール紙の多くの石版画に見られたテーマとも一致するが、文章の場合、作者がほとんどいつもバルザックだったことにも関係していると思われる。義兄のオーベールと組んだシャルル・フィリポンが自ら統括責任者(gérant)となり、オディベールを編集長として発足したカリカチュール紙では、そのどこにも名前が記されていないが、当時30歳のバルザックに、文章面の執筆がほとんど一任されていたらしい。「らしい」と言うのは、その間の事情を直接証言する資料は皆無に近く、もっぱら文章上の特色、そして特に、この時期のカリカチュール紙に載った文章のいくつか、後に潤色されてバルザックの小説作品の中に組み込まれているという、いわば状況証拠によるからである。ただ、バルザックとフィリポンは、二人とも、風刺新聞「シルエット」(La Silhouette)に積極的に参加して知り合っていた、また、バルザックはこの時期、カリカチュール紙以外のいくつかの新聞にも執筆していた

ことを考えれば、四つのペンネームの蔭に²⁾、等しくバルザックの姿を想定しても不思議はないだろう。もっとも、筆者がバルザックだからといって、この時期のカリカチュール紙の風刺の対象が、政治の領域からむしろ離れた社会風俗だったのが当然というわけではない。事実彼は同じ頃、5日に1度ずつ刊行されていた新聞「泥棒」(Le Voleur)紙に、地方に住む知人に最新のパリ情勢を伝えるという趣向で、「パリ便り」(Lettres sur Paris)を1号置きに連載するが、そこでは、後にカリカチュール紙の読者にもおなじみとなる七月王政新政権の政治家達の名前も頻繁に登場し、政治、政治家に対する彼の関心の強さを物語っているのである。ただバルザックにとっては、新政権の誕生が直ちに、世の中、人間の改革につながる筈もなく、フィリポンから風刺新聞での執筆を委された時にも、当時のフランス、パリの状態にも鑑み、風刺の対象となるべきは、政治という領域を飛び出した、もっと広い人間性一般と考えていたのだろう³⁾。

IV.で我々が既にその一部を見た創刊予告号の文章も、バルザック一人の手になるとされるが、彼がどんな新聞を構想していたかを、予告号の文章から見よう⁴⁾。

まず、毎号差し挟まれることになる石版画の素晴らしさを宣伝したバルザックは、そこに更にペンの力が加わることで、「我々が政治家達の、政治の世界の、愚かしさ、我々が習俗の滑稽さ、また我々が熱狂する文学理念、要するに、すべてが、上品な風刺の鞭の下を通ることになる」と宣言する。そしてそれを実現するためのカリカチュール紙の紙面は、次のように四つの項目から構成されると言う。

「まず、毎号冒頭には、『カリカチュール=風刺画/風刺文』(Caricatures)が一つ⁵⁾。この欄では、社会一般に広く見られる滑稽な事柄を、それを流行させた人々自身が、それを笑いものに始めた頃合を見計らって、風刺の対象として取り上げるつもりである。」

既に我々の見た「大司教」、「診察」は、それぞれ、創刊号、第2号のこの項目に載ったものだが、「それを流行させた人々自身が...」というのはどういう意味なのだろうか。古くから、広く世間に見られる、いわば、「古典的な」滑稽とでもいうものを指すのだろうか。

バルザックは更に続ける。

「次には、『奇想』(Caprices)もしくは『幻想』(Fantaisies)の欄が設けられ、ここには、フランス最良の作家達の溢れんばかりの想像力が迎えらることになる。(...)

『スケッチ』(Croquis)の名称で我々は又、真

実味に溢れた、優雅な、或いは辛子のきいた風刺文によって、当今の習俗を描くつもりである。

『漫画』(Charges)の欄については、本予告号に載せる実例をご覧になれば、充分我々のもくろみを理解して頂けるに違いない。」

後に述べるように、書評欄を兼ねることにもなる「幻想」欄 — 「奇想」の名称は実際には用いられなかった — としては、例えば、現実の脱出から死に到る阿片吸引者の体験を描いた「阿片」(L'Opium) (第2号：バルザック自身の文章) や、これもまたバルザック自身の作で、後に「フランドルのキリスト」(Jésus-Christ en Flandre) の中に組み込まれることになる「石のダンス」(La Danse des pierres) (第6号、1830年12月9日)などを、「スケッチ」欄としては、先に我々の見た「隣人」(バルザックの作)を例として挙げる事ができよう。

「漫画」の実例として予告号に載っている文章(『老伍長』Le Vieux Sergent：作者はアンリ・モニエ)では、「目下のところ(革命直後の1830年8月と設定されている)主人の居ないチュイルリー宮殿の前で、衛兵勤務についた叩き上げの老兵が、部下の新兵に、自分がこれまで仕えてきた様々な政体を列挙してみせ、そのいずれもが愚かな主人でしかなかったと教える。頭の鈍い新兵のとんちんかんな答えと質問、老兵の崩れた発音、そういったものを通して、革命、戦争の理念、英雄主義が、みじめなまでに茶化され、戯画化される。そしてこのトーンは、革命で封建的な政府を倒した筈の自由人が、新たに権力の座に就いたとたんに傲慢な態度をとる様を描いた「リベラリスト」(Le Libéral) (創刊号：作者はバルザックではないとされる) や、「ルイ・フィリップを王位に就け、最良の共和国(La meilleure des républiques)をつくった自由の戦士」⁶⁾として英雄化されたラファイエットと、彼に熱狂する人々 — この場合は、わざわざ海を越えてパリまで足を運んだイギリス人 — を笑った寸劇、「愛国的接吻」(Les baisers patriotiques：作者はバルザック)などによって引き継がれる。

「風刺画／風刺文」(Caricatures)、「幻想」(Fantaisies)、「スケッチ」(Croquis)、「漫画／戯画」(Charges)、いずれも、絵画、もしくは音楽の領域を連想させる区別だが、毎号この四つの欄を設け、それぞれに見合った文章を読者に提供しようというのは、「シルエット紙」では見られなかった新機軸である⁷⁾。それが、バルザック、フィリップ、オディベール達の間でどのようにして決められたかは定かではないが、バルザック自身が当時自分自身の内に感じていた可能性を、そのまま表したのではないだろうか。いずれにせよ、この四つの欄からなる紙面構成は、後に述べる変更を加えられながらも、81号(1832

年5月17日)まで存続することになる。

最初期の文章に関しては、次の二点を付け加えておこう。一つは、紙面構成の四区分の例を挙げたときにも解ったように、この時期にも、政治の領域が風刺の対象としてある程度は取り上げられていることである。ただそれは、社会風俗のテーマと比べると圧倒的に少なく、また、主として「漫画」欄で行われている。

もう一つは、3号(1830年11月18日)のバルザックの文章に見られる、例外的な試みについてである。そこでは四つの区分が取り払われて、後に「悪魔の喜劇」(La Comédie du Diable)の一部として、肉付けされ、取り込まれることになる文章が、「新サチール・メニペ断章／死者達による国民議会」(Fragment d'une Nouvelle Satyre Ménippée / Convention des Morts)と題され、それだけで全紙面を覆っている。古今東西の哲人、政治家、文人、犯罪者、宗教人、科学者等を総動員して構成された議会は、新しく発足した七月王政の議会をかすかに暗示しはするが、作者はあたかもそんなことにはこだわらないとでも言うかのように、自由に想像力を羽ばたかせる。まさにこれは、フィリップも注をつけて言うように、「同時に、漫画であり、風刺画であり、スケッチであり、幻想」である。カリカチュール紙上でのバルザックの傑作と言え、ラブレの流れを汲むこの文章を推して然るべきではないかと思われる。しかし同時にこの文章は、新政府の保守化の傾向の中で、フィリップが次第に強めていく政治的立場に対して、バルザックの創作態度が必ずしも副ぐわれないものになっていく危険を示していると言えよう。

2) 初期(1831年初め～同年の末頃：反政府の立場の明確化から、第35号の石版画に関する裁判での最初の有罪判決の前後迄)

第7号(1830年12月16日)では、依然四つの欄すべてがバルザックの文章だが、8号(12月23日)になると、「幻想」欄の「もし私が金持ちだったら」(Si j'étais riche)だけが彼の文章となる。冒頭の「風刺画」の欄は二つに分けられ、前半では、フランソワ1世の宮廷に仕えた道化師のトリブレ(Triboulet)が登場し、「今後は自分が、毎週木曜日に警鐘の鐘を鳴らしに来よう」と、次号から毎号巻末に載ることになる「ポシャド」(Pochades)欄を予告する⁸⁾。

同じ欄の後半では、七月革命の際には民衆の側について「英雄的に」戦い、その後も「自由な新しい政府」を支える力となる筈だった国民軍 garde nationale が、むしろ「漫画」欄の文章を思わせるような調子で茶化され、愚弄される。これ迄は既に見たように、「老伍長」、「リベラリスト」、「愛国的接吻」といった最後のページに置かれる漫画欄と比較

的短く扱われてきた新政府が、冒頭に置かれる「風刺画」の欄に初めて現れたのだ。そして更に、新政府を風刺の対象として取り上げるというこの傾向は、9号(1830年12月30日)「スケッチ」欄の「政治家達への新年の贈り物」⁹⁾、11号(1831年1月13日)の「教皇、ローマ、イタリア、フランス」(風刺画欄)、「ポルトガルの専制君主ドンミゲルの残忍さ」(スケッチ欄)、「国民軍の陰謀」(漫画欄)と、ますますはっきりしてくる¹⁰⁾。

他方、9号の末尾には、前号で予告された「ポシャド」欄が、トリプレのサインを伴って現れる。「ポシャド」とは、これもまた元来は、「彩色された素描」を意味する美術用語だったようだが、バルザックが予告号以来設けた四つの項目立てが、82号(1832年5月24日)以降は消えた後も、最終号に近い246号(1835年7月23日)まで、ほぼ毎号続くことになる。

ポシャド欄では、最近の1週間、そうでなくとも、ごく最近起きた出来事が扱われる。カリカチュール紙の文章中、いわば報道記事に最も近いものと言えよう。但し報道と言っても、それはむしろ、「事実を客観的に」述べようとするのではなく、なんらかの形で、ふざけたり、笑ったりする。語呂合わせを楽しむことも多い。はじめの内はトリプレのサインが見られるが、やがて署名はなくなる。後期になると、散発的に、A.C. (Albert Cler?) の文字が現れる。その時々で担当者が変わったのだろうか。それとも、毎週数人の編集者達が、機知を競い合ったのかも知れない。購読者にとっては、毎週のポシャドは、楽しみの一つだったかも知れない。実際のポシャド欄については、折にふれて見ることになるから¹¹⁾、いまは9号最初の「ポシャド」を覗いておこう。それは次のような文句で始まっている。

「三日間、革命が歩いて、無帽のまま、パリの町を散策した。おとなしいパリの町は、国民軍に追い回される革命を、自宅の窓から眺めることさえしなかった。が、とうとう貴族員議院法廷は、はなはだ丁重に (*fort civilement*) ポリニャック氏に対して有罪判決を下した。王は馬に乗ってパリの12の区に握手をばらまき、そのあと、町中に祝いの明かりが灯され、喜びに町中が沸き立った。」

歴史の本によれば¹²⁾、ポリニャックをはじめとする、シャルル10世治下最後の大臣達の裁判が貴族院法廷で行われたのは、1830年12月15日から21日にかけてのことで、強く死刑を要求する民衆の動きにも拘らず、21日には無期投獄の判決が下った。判決に不服な市民達が街頭に出て、一時は暴動の気配が漲ったらしい。

裁判が行われていた期間に準備された筈の8号¹³⁾にも、裁判への言及が全くないわけではない。ただ

それは、『両議会便り』紙を読む」と題された漫画欄の短な記事で、そこで笑い物にされているのは、町中の有料図書館 *cabinet de lecture* で、その日の「両議会便り」紙 — おそらく、裁判の様子が細かに報告されているのだろう — が届けられるのを待ちわび、いつの間にかいびきをかいて寝入ってしまう男の姿である。その意味で9号のこの文章こそが、カリカチュール紙が、時局に即した問題を扱った最初の例と言えるだろう。ただ、書かれた当時、その場に居合わせた人間なら、直ちに、なんの苦もなく理解したに違いないこの種の文章も、社会的文脈が遠のいてしまった我々にとっては、時として、なんとも理解が難しいものとなる。「歩いて、無帽のまま、パリの町を散策した」「革命」とは、極刑を要求して止まない共和主義過激派の市民達のことだろうか。「無帽のまま」とは?なぜ、「散策」(*se promener*) という悠長な言葉が使われているのか?彼らは、本来なら市民の味方となるべき国民軍の取り締まりにあう。自宅奥深く引きこもって、窓の外を眺めようとさえしない「おとなしいパリの町」(*La bonne ville de Paris*) とは、ひたすら秩序の回復を願う臆病な中産階層を指すのだろうか。イタリック体に置かれた *fort civilement* (はなはだ丁重に) とは、新政府が様々な事情から、極刑を避けたことを皮肉って言っているのだろうか。当時流行した文句かも知れない。こうした数々の疑問はさておいて、取り上げた対象、又その取り上げ方、両方の面で、この文章はそれまでのカリカチュール紙には見られなかったものと言えるだろう。

カリカチュール紙の石版画の変遷を跡づけようとした時、我々は、「最初期」から「初期」への推移を表すものの一つとして、13号(1831年1月27日)に載ったドゥカンの作品「自由女神の処罰」を取り上げたが¹⁴⁾、文章の観点からもこの号は重要である。と言うのも、冒頭、風刺画の欄の、「政治犯秘密裁判所におけるフランソワーズ・リベルテの裁判」が、自由女神の裁判の記述に当てられ、ドゥカンの石版画はその判決(烙印押し、印紙税)が執行されるところを描いているからである。言い換えれば、カリカチュール紙の同一ナンバーで、石版画と文章が、補足し合い、連動し合っている最初の例がここに見られるからである¹⁵⁾。

文章の内容も、被告として1790年生まれの自由女神、裁判官の他、やがてカリカチュール紙に繰り返し登場することになるラメット、ジュヌード、アンドレ・デュバン、政府に従順な下院議員達の集合、また、唯一被告に好意的な証人としては、つい最近没したばかりのバンジャマン・コンスタン等が次々と意見を述べるという趣向で、その後、カリカチュール紙上で仕組まれる法廷劇の雛型の様なものである。

更に注目していいのは、この文章に裁判記録としての装いをさせるため、末尾に付された「原本と相違なし、シャルル・フィリポン」である。これまで主としてバルザックに文章を任せてきたためか、統括責任者としてしか表に現れなかったフィリポンが、次第に強められる言論統制を前にして、自身が素顔を現したわけで、これ以後も、なにかにつけ彼自身が表に立つという姿勢が、次第にカリカチュール紙を特徴づけていくことになる。そしてその最も大きな契機となったのが、石版画「シャボン玉」の差し押さえ事件である。

もっともこの版画は別売りとして売り出されたもので、カリカチュール紙に付されたものではない¹⁶⁾。それにも拘らず、フィリポンはこの事件をカリカチュール紙上でも取り上げ、当局と戦う姿勢を鮮明に打ち出す。17号(1831年2月24日)の「王に仕えるもの達の幻想(気紛れ): シャボン玉」と題された幻想欄がそれだ。そこでフィリポンは、まず差し押さえ令状の皮肉なパロディーを作ってみせる。

『(...) 政府が約束したことのすべてを、政府からして貰う権利のあることすべてを、政府が人々に与えなかった、行わなかった、と主張するのは偽りであり、中傷であるが故に、また、憲章はすべての点において遵守されている — フランス人はすべて、千エキュの金利所得さえあれば、自由に己の考えを表明することが許されているではないか — が故に、また、(...) であるが故に、我々は以下の如く命令する。(...)』

作者、出版人、印刷人に対して等しく発せられた上記の令状に基づいて、シャボン玉 — その一つ一つに素晴らしい約束が記されている — 遊びに打ち興じる政府を描いた風刺石版画の、校正刷りが出版社で、石が印刷所で押収された。(...)

この厳格な措置は権力の力を証するものであり、石版画の作者はおそらく、彼が行った冗談の形を借りた中傷を正当化するのに苦労すると思われる。」

その上で今後は、この裁判の成り行きをカリカチュール紙の読者にも逐一報告することを約束する。

「我々は、読者諸氏にこの重大な争いの経過をいちいち報告しようと思う。問題の絵の作者が、たとえ本紙の統括責任者ではなかったにしても、当然カリカチュール紙にも関係する事柄だからである。

我々の約束はシャボン玉ではない。しかし或はこの事件自体が、我々の希望のように、立ち昇る煙のように、消え去ってしまうのかもしれない。
シャル・フィリポン」
オーベール出版社に対するこの最初の訴追は、そ

れから3カ月を経た5月23日に判決を迎え、陪審員から無罪の決定を得たフィリポンの勝利となるが、その時の模様がカリカチュール紙30号(5月26日)の付録として載っている。それによれば、はじめの3カ月、もっぱら社会風俗を風刺の対象とし、それなりに安定した収入も得ていたカリカチュール紙も、当局の介入によって政治の領域に大きく踏み込まざるを得なくなり、それ以後のカリカチュール紙の姿勢はこの時決定したとある。バルザックの意図との決別と言ってもよいだろう¹⁷⁾。

今度は、1831年末頃までの紙上に見られたいくつかの文章を紹介し、その後、この時期になって初めて現れたプランシュ(Planches)、ネメジス(Némésis)、二つの欄について触れておこう。

39号(1831年7月28日)は、七月革命一周年記念に当たる日の刊行だから、カリカチュール紙にとっても、特別の思い入れが予想される。事実、冒頭の文章は、その長い表題からして、ふだんとかなり違っている。

「華麗なるロンド。但し政治における初心者向けで、演奏は容易。(...) カジミール・ペリエ氏作曲。中道政治愛好家に捧げる。ペリエ氏は王室オーケストラの第一蛇管楽器奏者。初演は1831年7月23日土曜日、指揮は、フランス大劇場専属指揮者。」

7月23日という「初演」の日付けは、革命後の下院議員第一回総選挙の結果に基づいて召集された新議会の開会式で、以下に続く文章は、両院議員達を前に行われた恒例の国王演説をもじったものである。「華麗なるロンド」という、ウエーバーの曲を連想させる命名は、国王演説の随所で、「騒乱だ、騒乱だ」(l'émeute, l'émeute) という文句が、ロンド形式の繰り返し部分のように現れるからである。言うまでもなく、これは、当時、共和派、もしくはナポレオン派による度重なる街頭示威運動に、政府が頭を悩ませていた事態を反映するものである。

「一発の砲声で始まるというのはなはだ乱暴な導入部の後 (...)、お決まりの繰り返し部分が聞こえてくる。『貴族院議員諸氏、代議士諸兄、余は諸氏、諸兄に囲まれて幸せである。』ご覧の通り、ここ迄なんら変わったところはない。と、お気に入りの主題が入る。『騒乱だ、騒乱だ (...)』その直後の部分は、耳障りとしか言いようがない。『余はかつて述べた。憲章は真理となろう、と。余の言葉は実行された。』言いたくないことだが、演説中のこの箇所ほど調子つ外れの箇所はない。およそ音楽を解さぬ耳にすら、ここを聞くのはうんざりなのだ。(...)」

こんな調子で紹介される演説は、時折り例の繰り

返しを混ぜながら、予算案、外交問題、国民軍等々の問題に次々と触れていく。上で引いた箇所からも解るように、「耳障り」とか、「うんざり」とか厳しい言葉が並んではいないが、逆に、反語を使って皮肉に表現するよりも、風刺の文章としては比較的柔らかな調子と言えないこともない。

初期の文章で、冒頭の風刺画欄に載っているものを、あと二つほど見ておこう。初めに43号(1831年8月25日)。それは、表題「立憲君主国の国王を調達するにはどうしたらよいか、そのレシピー／共和制幻想に未だとりつかれていない国々の用に供するため」からも解るように、ルイ・フィリップ自身、ひいては、当時まだ、ヨーロッパに多く存在していた君主国の王達をからかったものである。

「立憲君主国の国王が、道化人形型のパン菓子と同じくらい簡単に型どりできるとか、バターをひいた大きな鉄板の上に金色に広がるクレープのように、即座に玉座に着けるなどと考えてはいけません。

昔は確かに簡単だった。国王製造には、屑拾い人を作るほどの手数もかからなかった。(…)

その後時代は移り変わって、今では、なんとか見られる国王を作り出すには、ほとんど、弁護士、医師、兎皮商人、猫いらず販売人、(…)要するに内容の如何を問わず、免許取得を必要とする職業人の場合に劣らぬくらい、面倒なのだ。」

であるから、「お困りの方々にぜひ調達法を伝授しよう」と言う。

「私は他にも、南京虫、狂犬病から身を守り、歯痛を癒し、魚の目やら、タコやらを、きれいさっぱり取り除く手も知っております。しかし、今日のところは、手早く、安上がりで立憲君主を製造するにはどうしたらいいかを、お教えしましょう。それに、みなさん、カリカチュール紙の購読以外に、お代は不要。さすれば、調達法はおまけでござる。」

こう前置きしてから、いよいよ王様調達法に入るのだが、それは、カリカチュール紙自身の石版画や文章にもしばしば現れ、おそらくは一般の市民達にも親しかったルイ・フィリップの容貌、特徴、持ち物を揃えるということで、他愛ないと言えば、他愛ない。

「ではよくお聞きあれ。今、革命が成就、完成したと仮定いたしましょう。で、皆様方の中に、ご自身で作られたものを、壊してみたいなどと、つまり、立憲君主をお持ちになりたいなどと、お

望みの方がおありでしょうか？ おや、居る居る、とどこかで聞こえたようです。では申し上げます。立憲君主をお望みの節は、雨傘一本、男を一人、馬を一頭、ワイン一びんお取りになって、四つをみんな一緒にして、賑やかなブルヴァールの辺りを歩きながら、充分混ぜ合わせるのです。」

市民王を自任するルイ・フィリップは、雨傘を抱え、好んで人混みの中に出ると言われるが、カリカチュール紙の石版画でも、傘は彼だということを表す「属性」の一つになっている。馬、ワインは、一般に王、王室の出費の象徴なのか、それとも、ルイ・フィリップ個人に関係しているのだろうか。

作者は、ルイ・フィリップが大勢の子宝に恵まれていたこと、そのための出費が時に国民の不満を買っていたことも忘れてはいない。

「この男は又、綺羅星の如き多数の子供達の集団を - 雄、雌、その他 - 持たねばならない。なぜなら、財政的破綻に瀕した国民にとって、将来、たくさんの殿下、妃殿下達に、豪華な持参金をつけねばならない日がやってくるとは、素晴らしい展望ではないか。男は最後に又、非常に愛想よく、非常に毛深くなくてはならない。それだけで充分。その上で、雨傘、男、馬、ワイン、このすべてを皇室費1800万フランの液で煎じて、四半期ごとにそこに皇室財産からの収入を付け加えること。はい、これで立憲君主、一丁できあがりでございます！」

「毛深い」とは、ルイ・フィリップの漫画肖像にいつも見られる、びんの毛、もしくは頬髭に相当し、1800万とは、議会で激論の末決められた皇室費の年額である。

作者の L.Derville は、Louis Desnoyers のペンネームで、この日は、創刊以来のオディベールに代わって編集長となっている。

61号(1831年12月29日)の風刺画欄では、ラテン語的語尾を持つフランス語による韻文詩というカリカチュール紙が時折り用いる形式で、当時の警視総監ジスケが取り上げられているが、ここではその前、まる1ページ以上に涉って置かれた、石版画差し押さえを報じるフィリポンの記事を見ておこう¹⁸⁾。「シャボン玉」以来、次第に数を増すこの種の文章は、多くの場合フィリボン自身の筆になり、カリカチュール紙の一つの特徴とも言えるからである。オーベール出版社出版の三つの石版画、「虹」、「ガルガンチュア」、「二人でひと飛び(=二人とも馬鹿)」の差し押さえを報じるフィリポンの文章には、一種の余裕のようなものが感じられる。とりわけ、上で我々の見た「シャボン玉」の場合、

また、最初の有罪判決を報じる56号(1831年11月24日)冒頭の二つの文章に見られる悲壮さ比べると、むしろこの機会を利用していっそう激しい批判を、検察当局に加えようというしたたかさが感じられるのだ。

フィリポンはまず、「貰うに適したものはまた、返すにも適したものだ」(Ce qui est bon à prendre est bon à rendre)という諺を出し、その一部を変えするという風刺文によく見られる手を用いて、いつの間にか当時の検事総長ペルシルを攻撃する。

「貰う(＝掴まえる)に適したものは、(...) 裁くのに適している。例の諺のこのバリエーションは、ペルシル氏のものだが、彼は事実、なんでもかんでも掴まえるに適していると考えている。もっとも雇われ撲殺人、殺人者募集人(...) だけは別だ。」

「雇われ撲殺人」、「殺人者募集人」とは、政府が当時、街頭示威運動をする群衆の中に放って、逮捕、弾圧の手助けをさせた者達である。「ガルガンチュア」－この絵のお蔭で、後に作者ドーミエは、投獄6ヶ月の刑に処せられる－については、フィリポン自身が有罪判決を受けたばかりの身でありながら¹⁹⁾、罪をいっそう重くしかねない次のような言葉を並べる。

「ガルガンチュアは、ルイ・フィリップに似てはいない。なるほど上部が狭くて下方に広がる顔、ブルボン家の鼻、濃い頬髭をしてはいる。だが、現在存命中の他のすべての君主達から、我らのルイ・フィリップをあれほど際立たせている率直さ、心の広さ、高貴さの雰囲気だけは、薬にしたくも見あたらない。

その代わりに、醜悪な顔、こちらのポケットの中の貨幣までをがたつかせるが如き食欲さ、それがガルガンチュア氏だ。」

今度は、初期のカリカチュール紙の文章で、幻想欄、スケッチ欄といった、比較的目立たない位置に置かれたものをいくつか見ておこう。バルザックの設けた区別はそのまま活かされているのだろうか。

59号(1831年12月15日)の幻想欄は、明らかにルイ・フィリップと解る立憲君主が、コンスタンチノーブルで目下西欧的改革を推進しようとしているトルコのスルタンに当てた手紙で、「今のようことを続けていたら、大変なことになります。ヨーロッパの民衆は正しい考え方をするとされているらしいが、正しく考えるとは、実は、何も考えないことです。文明化、改革などはお止めなさい。それでもたつてというならどうです、国民を取りか

えっこしませんか。あなたは、国民に文明の恩恵を与えたいと望み、私は、木片のような民衆の上に君臨したいのですから」と提案する。手紙は「国王」という署名で結ばれ、発信地は「ウインザー、デルヴィルによりアラビア語から翻訳」と記されている。ウインザーとなっているのは、当局から追及された場合に、言い逃れる可能性を残しているのだろうか。

幻想欄では、この時期にも既に、新刊書の紹介を時折り載せたりもする。41号(1831年8月11日)で、バルザックの「あら皮」(La Peau de chagrin)²⁰⁾が紹介されているのもその一例である。

革命一周年記念に当たる日に刊行された39号の風刺画欄(「華麗なるロンド...」)を我々は既に見たが、同じ日のスケッチ欄では、街頭運動に対して当時ますます激しくなった取り締まり、特に個人の逮捕が、かなり戯画的に描かれている。

「皇太子オルレアン公も今ではもうグレイの帽子を被らず、その父親も三色リボンを傘の下につけなくなったので、市民達もすべて、グレイの帽子を持っている場合には窓から捨てること(...)、三色リボンの方は、猫、妻、ナイトキャップともども、自宅に置いておくようにと決められた。(...) (..)それから今度は、帽子を被った紳士が通りかかる。－『もしもし、あなたを逮捕致します』警察に仕える者が言う。－『なんですって? どうしてです?』紳士が尋ねる。－『あなたの帽子にリボンがついていないからです。だって、と言うことは、ポケットに一つ隠し持っているということですからね』帽子の男はよほどの、理屈屋だったに違いない。なぜなら彼は、相手の理屈に反論しようとしたからだ。が、国民軍の一小隊が彼を連れ去り、そんな暇を彼に与えなかった。」

三色リボンとは、言うまでもなく、共和派陣営の旗印、ルイ・フィリップ自身革命後もしばらくはそれをつけていた。グレイの帽子とは、傘、握手とともに、市民＝王として、民衆、特に中産階級の中に溶け込もうとしていた頃のルイ・フィリップの「持ち物」の一つだろう。

もっとも、スケッチ欄までがいつもこうした政治的色彩を濃く持っていたわけではなく、むしろ「社会風俗を描こう」というバルザックの構想の方に近い場合も少なくなかった。22号(1831年3月31日)の「日曜日」がそれだ。そこでは、当時のパリジャン達がどんな風に休日を過ごしていたかが、社会的階層、身分、職業別に語られる。「信心深い老女達」(dévotés)は、飼い犬を散歩させた後、そのまま日曜日の荘厳ミサに参列し、「一日の残りは、慈悲深く、敬虔な気持ちを持ち続けながら、隣人の悪口を言って過ごす」。具体的な観察の結果と言う

よりも、*dévotés* と言えはそういうものという、伝統的、常套的な表現だが、以下、学生、小売り店の主人、新兵、教師、中産階級、庶民 (*homme du peuple*)、役人、富裕階層と続く。それによれば、階層、職業を問わず、天気がよければ郊外に繰り出していたいらしい。夜中の12時頃になると、ざわめき、雑踏が聞こえてくる。到るところの入市門から大勢の人々が帰ってきて、中心に向かって流れていく。車が交差し、歩行者が歌い、酔っぱらいが罵り、子供が泣く。誰もが行けるところまで行ったのだろう、疲れ切って家に向かう。「パリジャン達は、七日目の憩いとは、かくあるべしと考えているのだ」。

最後に初期の漫画欄 (Charges) の文章の例を一つ挙げておこう。他の欄の記事が、少しずつ漫画欄に近付いてきただけ、漫画欄自体も、より過激になっていく傾向を見せる。63号 (1832年1月12日) のこの欄では、「ダルグー氏の鼻の一日」と題された文章が、カリカチュール氏の読者にはお馴染みとなった人物を、これまたお馴染みの特徴とともに取り上げている。

当時カジミール・ペリエ首相の下で、商業・建設大臣を務めていたダルグーは、首相の信任が厚かったと見え、「首相はダルグーの鼻で匂いを嗅ぎ分け、後者は前者の目でしかものを見なかった。(…)二人が互いに腕と鼻を抱き合って、仲良く散策する姿さえしばしば見られた」。同じ作者は又、次のような「事件」も報告している。

「カフェの席を立ったダルグー氏は、じっと動かず何かを待っているらしい一人の客の顔つきから、彼が奥の席に行きたがっていることを見抜き、まるで、あの親愛なるペリエ氏の主宰する閣議にでも出ているかのように、道をあけた。壁にぴたりと身を寄せ、それからまたもとの席に戻ったが、その時とつぜん、なにか邪魔なものが自分の鼻の下がるのを感じた…先刻の客が近眼で、自分の帽子を、帽子掛けだと思ったダルグー氏の突出部に掛けたのだった。」

検事総長のペルシルとともに、とりわけ言論の規制に熱心だった大臣を掴まえ、その身体的「欠陥」という、本人にはどうしようもない点をあげつらって笑う。見方によっては、卑怯とも、子供騙しとも言えよう。ただ、笑いの対象となる者達が、強大な権力の行使者だったことを忘れてはなるまい。

カリカチュール紙が発売した時点ではまだ考えられていなかった項目、ポシャド欄については、その最初の現れを覗いたが、1831年半ば近くになって紙面に現れた、他の二つの項目についてもここで触れておこう。31号 (1831年6月2日) から終刊号近くまでほぼ毎号載ることになる「プランシ

ユ＝石版画注釈」(Planches) と、29号 (1831年5月19日) から75号 (1832年4月5日) まで、これ又、ほぼ毎号載ることになる「ネメジス＝正義 (復讐) の女神」である。

「プランシュ」と呼べる文章は、その名称こそ付けられていなかったが、記事と版画を連動させて、より大きな風刺的效果を出そうという傾向が次第に定着するとともに — 我々は、その早い例を13号における「自由女神の裁判」で見た — 実質的には存在していたと言えよう。16号、19号 (1831年2月17日、3月10日) のグランヴィルの版画「1831年のカーニバル①、②」は、それぞれの号の冒頭で詳しく説明されているし (前者は、バルザックの文章)、24号の同じくグランヴィルの石版画「プラガの砲火」も、風刺画欄の文章に組み込まれた形で説明されている。

正式に「プランシュ」と銘打った文章はどんなものだったか。多くの場合、フィリポンのサインがあったが、サインのないもの、又、他の書き手によるものもある。長いものも、短いものも、悲壮なものも、思いきりふざけたものもある。今、31号に最初に現れた「プランシュ」を例として引いておこう。

この日の石版画の1枚は、画面中央に、冠からそれとわかるローマ教皇がどっかと腰を下ろして辺りを睨みつけ、その足元に殺害された男達の死体が無数に転がっているという構図である。向かって右横には、処刑された男達がぶら下がった絞首台が、並木のように連なり、左横には、車裂きの刑具が置かれている。自由、独立を求める共和派の動きを、オーストリア軍の力を借りて封じ込め、ローマに戻った教皇である。それに対するフィリポンの注釈は皮肉である。

「教皇様が教皇領に戻られた。なぜなら、『私の王国はこの世にはない。(イエス・キリスト)』のだから。

革命に参加した、もしくはそれを妨げようとしなかったとされた愛国者達は、軍事法廷による裁きを受けた。なぜなら、『汝、殺すなかれ。自ら手を下すにせよ、同意によるにせよ。(十戒、第八の戒め)』なのだから。(…)」

もう一枚の版画では、ルイ・フィリップとすぐわかる頬髭の濃い、貴族風の服装をした男が、なにものかから身を守ろうと、半身に構えている。左手は斜め下に差し伸べ、右手は肩の後ろ、上方に引いて、短剣のようなものを持っている。しかしよく見ると、それは「勅令」(Ordonnance) と書かれた紙を丸めたものだ。右足を一步引けば、そこは断崖絶壁。反対側の壁には、フリギア帽を被った女性の影が映っている。どうやらそれは、かつての彼自身の影らしい。

絵の下には、ただ「.....!!」と書かれている。フィリボンによる、ブランシュ欄での注釈は次のようなものだ。

「.....!! こんなタイトルを付けられたのでは、我らが友人ペルシル氏もさぞ困惑されたことであろう。この腹黒い沈黙の中に、どんな言論の自由の乱用を、あの方が見られるとも限らない。(…)かわいそうな陪審員諸君、罪もないのにあなた方は、検察の雄弁にじっと耐えなくてはならないだろう。(…)なぜなら — 誤解してはいけない — カリカチュール31号は、紛れもない犯罪行為なのだから。少なくとも、絞首刑に値する犯罪なのだ。ここに描かれているのは、『自らの影におびえる権力、根も葉もない恐怖から、真の危険が見えなくなってしまった権力、なのだ。』なるほどこの絵は、他愛のない絵だ。しかし、この絵からこのような記事が生まれた。それこそが犯罪、それこそが検察当局への侮辱なのだ。だから、或いは我々は、訴追されるかも知れない … 王に対する名誉毀損のかどで。フィリボン」

29号(1831年5月19日)には、とつぜん「ネメジス」(Némésis)という欄が設けられ、16行だけではあったが、12音節からなる韻文詩が載った。「1831年のレジオン・ドヌール名誉勲章」と題され、七月革命に際しての勲功を賛えるため、特にこの頃大量に配分され、反政府紙の批判的となっていた勲章が、いかに汚れたものとなってしまったかを、うたったものだった²¹⁾。

「ああ、名誉の娘よ! 無知の十五年が、不純な息吹で、充分お前を色あせたものにしたと思われていた。

お前は信じていた、友愛の旗が戻ってくる時、お前も又、原初の輝きを再び取り戻せるのだと。それがどうだ、かの旗が、かつては、激戦の中、髪振り乱して突進し、傷つき、血にまみれて、野営の天幕に戻ってきたあの旗が、

今や都市の安逸に傷つき、雨に打たれた鉛のドームの上で、まるで寡婦の額に被さるベールに似ている。そして、栄光の手に摘まれていた名誉の

バラであるお前は、七月の太陽に再び花開くことができなかった。あたかも、畑の畝を通る鋤のように、大臣が一人、街頭で、盲滅法お前を撒いている。そして町行く者は、まるで盗みでもする

かのように、こそこそと、お前を拾い上げ、顔ならぬ胸を赤らめる。」

作者の名前はなかったが、その必要もなかった。「ネメジス」とは、1831年4月10日から翌年4月1日迄、毎週日曜日にバルテレミーが、協力者メリーとともに刊行した、週刊風刺新聞で、毎号アレクサンドランの定型詩が、いくつか載っている。そしてその一部が、29号以降75号までのカリカチュール紙の2面ないし3面に、転載されているのである。

ネメジスとは、ギリシャ神話に登場する恐ろしい復讐の女神だが、ここではむしろ、この世で正義の神に見放された者のため復讐し、真の正義を実現する神といったニュアンスであるようだ。

バルテレミーとフィリボンの間にどんな契約が結ばれたのか定かではないが、日曜日の「ネメジス」紙に出た作品が、4日後の木曜日刊行のカリカチュール紙に転載される。但しもとの詩全体ではなく、かなりの長詩の7、8分の1くらいが抜粋され、独自のタイトルを付けられることが多かった。例えば、32号(1831年6月9日)には、「我らの救世主達」(Nos Sauveurs)と題して、七月革命で活躍してフランス社会を救ったと自称する人々の、その後の変貌、保守化ぶりをうたった、14行の詩が載っているが、これはがらんらい、「検閲印紙」(Le Timbre)と題された詩の12分の1ほどである。つまり、抜粋する箇所と、新しいタイトルの付け方によって、カリカチュール紙は、かなり独自の意味付けを行っていたと言えるのである。当時、反政府の言論界で圧倒的人気のあったバルテレミーの人気を、ある意味で盗もうというフィリボンの戦略だが、同時にこれは、共同戦線の樹立でもあり、また、12音節の脚韻詩という、古典的な風刺詩の伝統を取り入れることで、カリカチュール紙全体に支配的な、よりくだけた調子とのバランスを狙っていたとも言えよう。

3) 中期(1831年末頃～1832年末頃)

石版画の面から見ると、この時期は、国王に石工の姿をさせて真正面から描いたものが、不敬罪に問われ、フィリボンは、罰金2000フラン、投獄6カ月の刑に服さなければならなかったが、同時に、その裁判中にフィリボンが描いた梨形の顔が人気を博し、まるでそれが、ルイ・フィリップの紋章でもあるかのように、カリカチュール紙はもとより、到るところに — 例えば、壁の落書き — 出現した時期である。一方、法的追及をなんとか逃れようとする試みが、国王を、真正面からではなく、後ろ姿で、横顔で描く工夫などに現れる。そして社会的には、1832年6月のパリ動乱、戒厳令を中心として、反政府新聞に対する当局側の締めつけがますます厳しくなっていくという状況だった。当然、締めつけの厳しき、繰り返される刊行直前の差し押さえ、罰金刑等に応じて、カリカチュール紙の紙面も、これまでにまして戦闘的な様相を呈していく。冒頭

には、「本紙第...回目の差し押さえ」といった報道が頻繁に現れ、特に、56号(1831年11月24日)での「罰金支援金募集」以降、翌年4月迄ほぼ毎号に載せられる「応募者リスト」²²⁾、また、90号(1832年7月26日)に載った「言論の自由協会」設立の宣言以後、毎月1度ずつ、約束にそって配布される石版画の説明が、これまでとは違った姿を、カリカチュール紙に与えることになる。

では、こうしたすぐ目につく変化とは別に、この頃のカリカチュール紙には、どんな記事が、文章が載ったのだろうか。既に我々が見たように、初期においても、Derville というペンネームで、かなり多くの記事を書いていた Louis Desnoyers の文章が更に増えるにつれて、なにか変化がなかっただろうか²³⁾。それに80号(1832年5月10日)以降、オディールに代わって、彼が正式に編集長の座につく²⁴⁾。82号(1832年5月24日)からは、これまでほぼ忠実に守られてきた四つの欄の区別がなくなり、「ブランシュ」、「ポシャド」だけが残る。また、1年近く続いていたネメジス紙からの定型詩の一部転載も、ネメジス紙自体の廃刊のため、75号で打ち切られる。この意味で、中期自体が80号辺りの前後で分かれるから、以下では、まず、73、74、75号に連載された「フィリポタン」(Le Philipotin)を、次いで80号以降のいくつかの文章を見ていきたいと思う。

フィリポタンとは、(ルイ・)フィリップ党とでも訳せるだろうか。言うまでもなく、語尾は滑稽な響きを持つが、「小柄でもなければ大きくもなく、肥ってもいなければ痩せてもいない。(...)誰にでもあるが故に、彼にも顔がついている。但しその顔には、なんの特徴もない」といった平凡そのものの人物で、1815年以来食品屋(épicerie)を営んでいる。七月革命の際、なんとはなしにルイ・フィリップにつき、それ以来彼の熱心な信奉者となってしまった。当時、街頭でやたらと握手を振りまいていた王に握手されると、「2週間というものは、自分の存在から、貴重な歴史的断片を流し去る決心がつかなかった」。そしてその後の彼の頭には、「秩序、閱兵、守衛、逮捕、パトロール」しかなくなる。つまり国民軍兵士として、ひたすら祖国と王に、忠節を尽くしているわけだ。

ところがある日、街頭の示威運動を取り締まっていた彼は、無抵抗の市民を銃剣で刺し殺してしまう。この段階では彼もまだ、人間としての良心を持ち合わせていたので、その呵責に耐えかねた彼は、店の客でもある上官のもとに、どうしたらいいか相談に行く。事情を聞いた上官は、「明日、砂糖とろう燭を届けておいてくれ」と、職権乱用まがいの注文をしておいてから、「彼が殺したのは人間ではなく、秩序の妨害物、王座と商業の敵であり、彼は祖国か

らそのような邪魔を取り除いたのだから、この際祖国は彼に、持ち運び可能なバンテオンとも言えるべき、レジオン・ドヌール勲章の榮譽を授けるに違いない」と慰め、励ます。それを聞いて安心したフィリポタンは、新しい宮廷を作った市民王に、然るべき職を与えられることを期待して、早々と食品屋の店まで売り払ってしまう。アンリ・モニエの「民衆生活情景」、或いは後のフロベールの描いたオメーといった人物像を連想させるが、国民軍、バンテオン、勲章、新しい職の争奪戦など、状況はすべて、風刺文特有の誇張があるとは言え、この時期特有の緊迫感を伝えているようだ。

続く74号(1832年3月29日)では、フィリポタンの住居の内部が紹介されるが、前号にも増して、ルイ・フィリップへの心酔が進んでいて、家具調度、服装、すべてにそれが現れる。例えば食堂にかかっている肖像画の列、それはフィリポタン自身の先祖のそれではなく、主君の、又、主君の家族の肖像画である。お定まりのヴァルミー、ジェマップ両戦場の絵もむろんある²⁵⁾。しかしフィリポタンがいちばん苦心したのは、その時々でどんな服装をしていれば、王座と商業の敵として撲殺されずにすむかだった。梨を食卓に出してはいけないという、料理番への禁令も徹底していた。

六歳になる息子 — 皇太子の当時の綽名グラン・プロ(Grand Poulot)にちなんでプロタンと名付けられている — に対する扱いも独特である。男の子に国民軍の服装をさせるのは当時珍しくなかったが、フィリポタンの場合には一歩進んで、息子に、国民軍の全兵種の格好を、曜日毎に変えながら、させることにした。月曜日は擲弾兵、火曜日には砲兵、水曜日には選抜歩兵...といった具合である。ところが子供のこと、始終あちこちを引き裂くのでまともな補修も間に合わず、国民軍のあらゆる兵種の軍服を、今では一度に身につけている有り様である。

ところが、こうして幸せな日々を送っていたルイ・フィリップ信奉者にも、悲劇的な最後が待っていた。75号(1832年4月5日)はそれを扱っている。

フィリポタンは、政府の要職にある例の保護者から、待ちに待った手紙を受け取る。以前から依頼してあった有利な職が、とうとう舞い込んできた、と言うのだ。大慌てで盛装した彼は、貸し馬車を雇って保護者の邸へ向かうが、途中なんども交通渋滞に巻き込まれて、着いた時には約束の時間を大幅に過ぎていた。途中、ルイ・フィリップ自身、妃、王の長男、次男、それぞれが通ったため、その度毎に一時交通が遮断されたのだった。それでも期待に胸をふくらませて、渡された手紙を読む。目がちらついてよく読めない。「知事職!局長職!部長職!... そのいずれでもない。もう少し落ち着いて読もう... ああ、なんという失望! 彼が任命されたのは、スト

ラスプールの城の門衛でしかない... 『私のような立派な人間を! ...』

絶望の余り、保護者の邸を飛び出したフィリポタンは、待たせてあった貸し馬車に乗ることも忘れ、帽子屋に飛び込み、赤い帽子（共和主義者の象徴か）を買う。そのためか、1時間後にはフォルス監獄に繋がれていたが、それから3時間後には病院で高熱にうなされ、その晩にはもうこの世にいなかった。当時、パリでも流行していたコレラに冒されたのだろう。記事は付け加えて、明日、カリカチュール紙編集局に集まり、フィリポタン氏の葬儀に参加するよう呼びかけている。

大臣、上下両国会議員、国王、皇太子、といった政治の中枢を支える人物でもなければ、検事総長、警視總監でもなく、それらをいつの間にか支える階層となった人々を風刺の対象として取り上げるのは、これ迄のカリカチュール紙にあっても、文章の面でも、版画の面でも珍しいことではない。ただそれは多く、いつのまにか本来の理念を忘れて、却って民衆を弾圧する側に廻るようになった国民軍の構成員としてである場合が多い。上で我々が見てきた、三つの号のシリーズの中心人物も、国民軍兵士として民衆を殺傷し、しかもその後、息子に国民軍の軍服を着せて得意になったりする。しかし彼の場合、もう少し広い視野から描かれているように思われる。彼を保護していると称しながら、その実もっぱら彼を利用している、有力政治家、王とその家族が登場し、風刺の対象となる。例えば王は、身分を隠して街で車を走らせながら、フィリポタンの雇った貸し馬車の馬に怪我を負わせるし、政治家は食品屋への借金を踏み倒し、無償で商品を届けさせたりもする。

国王信奉者フィリポタンに、作者が次々ととらせ行動、次々と置く状況、こういうのをグロテスクというのだろうか。確かに読者の笑いを誘うよう仕組まれてはいるが、明るい笑いではない。余りの期待はずれに国王への忠誠心を捨て、共和派に寝返り、投獄され、コレラで死んでしまうという「悲劇的」結末は、葬儀に参加せよという筆者の呼び掛けとともに、単純な笑いとは違った感情を惹き起すものではないだろうか。

オディベールに代わってルイ・デノワイエが編集長の位置に就いてからしばらくしての84号（1832年6月7日）が、平常通り発行できなかった事情に就いては「カリカチュールとはどんな新聞か1/2」で既に見た²⁶⁾。ただ、同じ84号は、刊行後、その冒頭の文章が国王の名誉毀損の疑いで差し押さえられている。石版画がらみではなく、文章だけの理由から訴追されるのは、比較的稀だったから²⁷⁾、ここでは何が政府を怒らせたのか見てみよう。この時期は、戒厳令とともに、パリでもコレラの流行が

まだおさまっていない時期でもある。

「もしもルイ・フィリップご自身が、我々みんなが崇め、尊び、心から愛しているあのルイ・フィリップその方が、とつぜん目をつぶってしまわれるようなことでもあれば — ああ、神よ、そのようなことをお防ぎ下さい — そして、2、3百人の医師達がまるで羊の股肉でも切り裂くように彼を切り刻み、翌日の新聞にその断片を投げ入れることでもあれば、誰しものが、それまで流していた涙をびたりと止めて、面白くもなさそうにこんな風に言うことだろう。『なに、なに、これがあの強大な君主様？ あれほどの才を天から授かっていた偉大なる王様の頭蓋の中に、こんな小さな脳味噌しか入っていなかったとはね。あれほど大胆な戦士、ジェマップの英雄、フランスの名誉にかけてあれほど敏感だった君主が、こんなちっぽけな心臓しか持っていなかったとはね。それに、陛下の結腸には、庶民と同じ便状のものしか詰まっていなかったとは！ いやはや、涙も潤れるわ！ 一杯飲みに行こう！』 ...」

社会的に上位にある人間の尊厳を傷つけるために、昔からよく使われる手段の一つとして、身体的には彼らも庶民と変わらないという事実の、ことさらの確認がある。ここに見られるのは、その極端な形と言えよう。作者（ここでは、無署名で誰かわからない）は、ひとえに上記の最後の言葉を吐きかけるために、話のお膳立てをする。「現今は、すべてがめざましい進歩を遂げている。長靴、料理、鉄道、民主的な王様、等々...。ただ、医学だけは旧態依然で、猖獗を極めるコレラに対してさえ、医師達はなんら有効な手段を持ち合わせないが、そのくせ死者に対してはどんどん解剖を行い、その費用の支払いを要求する。」というところから、もし国王が命を落としたらという仮定に話を持っていく。

コレラの流行、騒乱、言論活動や街頭運動の規制、戒厳令施行と社会的動揺の大きかったこの時期、上に引いたようなグロテスク指向の文章がカリカチュール紙にももっと多く見られても不思議はなかったかも知れない。しかし実際にはむしろ、少なくとも表面的には抑制のきいた文章が多いのは、度重なる差し押さえの措置を恐れてのことだったのだろうか。例えば88号（1832年7月12日）の四つ目の記事（作者はDerville）は、革命2周年記念としての催しの提案に当てられているが、田園詩劇風の平和な装いを取っている。もっとも、三日間のプログラムを述べる言葉は、「自由のために命を落とした者達のための追悼式は行われぬ。現今の幸せの状態を考慮するに、生者よりむしろ死者の方が幸せだと考えられるから...」などと、あい変わらず手厳し

い。

初期カリカチュール紙には例外的にしか見られなかったもので、中期以降ほとんど毎号のように見られるものに、新刊書の紹介、批評の記事、また、オーベール出版社、つまり自社の出版した石版画の宣伝広告記事がある。

60号(1831年12月22日)以降²⁸⁾、初めは幻想欄で、やがては新たに設けられた「文学」(Littérature)欄で、多い時には数冊の新刊書の紹介が行われる。多くは若い作家の書いた小説、もしくは歴史書である。

しばらく以前からカリカチュール紙は、「刊行した書物を2部送りなさい、そうしたら、カリカチュール紙上で内容を紹介してあげましょう」という呼びかけを行っている²⁹⁾。その際、金銭的取り決めを伴ったかどうかは定かではないが、求めに応じてカリカチュール紙のもとに送られてきた書物は少なくともなかったようである。

記事は他の部分に比べてポイントを落とした活字で組まれ、作者名、出版社名はもとより、内容が読者の関心をそそるように、ごく丁寧に記述されている。81号(1832年5月17日)の場合のように、その書物の挿し絵がそのまま載っていることもある。紹介された書物のほとんどは、今日では忘れ去られているが、中には、ジョルジュ・サンドの「アンディアナ」(Indiana)のような例外もある。

「(...) なんと見事なコントラストが、なんと変化に富んだ情景が、並んでいることか! これ以上、飾り気なく、しかも気持ちよく構想されたものを私は知らない。事件が、まるで実人生におけるかのように、自然に起き、続いていく。それでいて、時としては、偶然の積み重ねの果てに、シェークスピアにも真似できまいと思われるほどの悲劇が生まれる。(...)」(83号、1832年5月31日、文学欄での『アンディアナ』紹介から)

他人をからかい、嘲笑し、皮肉り、おとしめることを使命とする文章の集められた紙面の中で、こうした贅辞は、これまで見られなかったトーンをこの新聞に付け加えているように思われる。

同様に中期以降になってカリカチュール紙の紙面に登場するものに、宣伝、広告の類いがある。と言っても、中期におけるそれは、自社、つまりオーベール出版社刊行になる石版画のためであることが殆どで、大きな活字を用いた、広告料を取っての広告が多少とも現れるためには、後期を待たねばならない。

厳密には39号(1831年7月28日)と45号(9月8日)の幻想欄に、職業的デザイナーのためにオーベール社が販売する図案集の宣伝が既に行われているが、61号(1831年12月29日)の末尾で、「お嬢さん方」にお年玉として送るのに適した版画集「夢」(Rêves)、その他の宣伝が見られるのが、一般向けの宣伝としては最初である。又、71号(1832年3月8日)では、フィリボン自身が、オーベール社が石版刊行に関してはいかに固く約束を守ってきたかを誇らしげに述べ、同時に最近刊行された版画を宣伝している。154号(1833年10月17日)の最後のページに、初めて大きな活字を用いた広告が現れるまで、こうした自社商品の宣伝が、殆ど毎号続けられる。

中期から後期へと移り変わる頃に、オーベール社で起きた忘れられない事件がある。日刊紙「シャリヴァリ」(Le Charivari)の発刊である。カリカチュール105号(1832年11月8日)には、『「シャリヴァリ」発刊、毎日新しい絵付きで」と題された、次のような文章が見られた。

「週に1度だけ刊行される『ラ・カリカチュール』は、いつでも一流新聞であり得るし、また、そうでなければならない。その絵は、心をこめて描かれ、上質の紙に、細心の注意をもって印刷されていて、この新聞を、バックナンバーを揃えて、書棚を飾るにふさわしいものになっている。我々に協力してくれた画家達の内、とりわけ読者の支持の大きかった者達は、今後も本紙のための絵の制作を専らとすることとなろう。我々としては、名誉にかけてもこの新聞を、これまで存在した、またこれから存在するであろう、同種の新聞より優れたものとするつもりだ。」

それに対して、今度発刊される新聞は、日刊であり、「政治上の鋭い風刺の味よりも、多様な風俗の登場をより好む人々のためのもの、確かに値段は安い、それは印刷その他をより簡便なものとするから。要するに、カリカチュールとシャリヴァリは全く別なもの。だから、カリカチュールの読者は、新しい新聞に惑わされずに、これまで通りカリカチュールを購読しなさい」というわけだ。

カリカチュール紙のこうした記事を読む限りでは、刊行者自身、シャリヴァリ紙を一段劣るものと考えているようだが、その編集陣、担当した画家達の顔ぶれなどを見れば、新しい新聞に対するフィリボン達の熱の入れ方が並々ならぬものであったことが伺える。ただここでは、シャリヴァリ紙の発刊が、特に財政面でオーベール社を助けたに違いないこと、ひいては1835年の九月法を契機とするカリカチ

ジュール紙の廃刊を、比較的スムーズにしたと思われることだけを指摘しておこう³⁰⁾。

4) 後期 (1832年末頃～1835年8月の廃刊直前まで)

この時期のカリカチュール紙を眺めて一番目につくのは、前の時期に既に現れていた自社刊行物の宣伝広告が続けられ、やがてそれがより大がかりな広告活動に発展していくことである。以下では、初めに広告欄の拡大について触れ、ついでそれ以外の紙面構成の変化、さらに、具体的ないくつかの記事、文章の紹介を行っていきたいと思う。

前期では、幻想欄もしくは文学欄で行われていた新刊書の紹介が、この頃になると、「文学通信」(Bulletin littéraire)、或いは、「書籍通信」(Bulletin bibliographique) とよりそれらしく命名された欄で、質、量ともに充実して、毎号のように行われるが、自社刊行の石版画の宣伝も、153号(1833年10月10日)迄、これまで通り続けられる。新しい試みが見られるのは、次の154号(10月17日)の最終ページにおいてだった。そこでは、中央辺りの左欄と右欄が打ち抜かれ、黒々とした大きな活字で、「子供美術館／人物2000以上、主題800以上 (...)」(MUSEE DES ENFANTS. / Renfermant plus de 2,000 personnages, et plus de 800 sujets(...)) と記されている³¹⁾。同じページの少し上の左欄には、普通の大きさの活字ではあるが、オーベール社ともう一社の協力になるこのアルバムが、いかに優れた画家達によるものであるか、いかにこの種のものとして廉価であるかが宣伝されている。

こうした大型、もしくはより規模の小さな広告は、初めは散発的にしか現れないが、194号(1834年7月24日)辺りからは、ほぼ毎号載るようになる。

この広告活動で、特に関心を引くのは、216号(1834年12月25日)の最終ページの、殆ど全面を費やして宣伝されているパピログラフィ(Papyrographie)である。これは、フィリポン自身が考案した一種の版画らしく、215号(12月18日)の説明によれば、特殊な紙とインクが用いてあるので、普通の石版画(lithographie)と違って、水さえあれば、それを他の紙、木片、石膏、絹地、動物の皮などに簡単に移すことができるという。気に入った図柄を、手軽に、自分の持ち物などにプリントできるということだろうか。どれくらい多くの人々が、例えば、フィリポンの推めに従って、「知人へのお年玉にするため」買い求めたかは不明だが、この頃から廃刊に到るまで、彼が、カリカチュール紙の、ひいては、オーベール社全般の財政問題に、それまで以上に気を使ったのは確かだ。

パピログラフィは、一ヶ月半ほどの間、最後のペ

ージで大々的に宣伝されたが、やがて、種々の商品の中に埋没し、228号(1835年3月19日)以後は完全に姿を消してしまう。それ以後は、同じ最終ページに時折り現れる「カリカチュール紙広告1行1フラン」という文面を見てだろう、例えば、オーストリアのもと宮廷所有の大きな城の持ち株募集(230号1835年4月2日)などもあったが、多くはいぜんとしてオーベール社自身の出版物で、おそらく余り直接の現金収入はもたらさなかったのではあるまいか。1835年の、いわゆる九月法成立と同時に、フィリポンがカリカチュール紙を廃刊とした原因の一つは、そんなところにもあったのかも知れない。

広告にこれまで以上の紙面が割かれたからと言って、カリカチュール紙の風刺活動が力を弱めたわけではない。この時期になっての新しい項目の誕生も、それを示している。193号(1834年7月17日)から224号(1835年2月19日)迄、ほぼ毎号現れ、その後も散発的にはあるが執筆された「週間小幻灯、別称、今週の主要事件記録補遺、...の輝ける治世の歴史編纂のため」(Petite Lanterne Magique hebdomadaire ou Collectiana supplémentaire des principaux faits de la semaine, pour servir à l'histoire du glorieux règne de ...) がそれである³²⁾。...の部分には、むろん、「ルイ・フィリップ1世」という言葉が、カリカチュール紙がいつも彼に与える形容詞をふんだんにつけて置かれる³³⁾。

カリカチュール紙は、その週刊誌という性格からして、また、石版画の製作 — 特に彩色したりすれば — に時間がかかったから、最新のニュースを扱うことは難しかったに違いない。そもそも、創設者の念頭には、そのような報道性はなかったのかも知れない。創刊後しばらくして設けられたポシャドの欄は、多少とも新聞としてのこの欠点を補おうとしたものだが、「週間小幻灯」にはいっそうはっきりその目的が伺われる。最新のニュースを、風刺しながら報道する、それがこの欄の目指すところだったのである。193号の最初の「小幻灯」は、擬古文的な前置きの後、次のような調子で続いている。

「といったわけで、先週の事件として皆様方に覚えておいて頂きたいのは、ある不思議な人物がパリに出現したこと。この人物は、上下を問わず、あらゆる階層の噂話の好きな連中の好奇心を、ずいぶん刺激したものだ。この人物とは、女性、この女性とは、ナポリの女性、そしてこのナポリの女性とは、ある王女、そう、町の噂を信じるならば、れっきとしたある王家の王女で、この王女様、当今切っての著名な軍人の奥方になるべく求められたのだが、相手の肖像画を受け取ったものの、その正確度をば疑い、自らの目で実物との類似の度

合いを確かめにやって来た、というのがもっぱらの噂。

申すに及ばぬことながら、画像と実物との突き合わせが済むや、王女は早々に旅立ち、当今切つての著名な軍人は、なお、花嫁候補者を受け付ける状態にあるとのこと...

なかなか縁談のまとまらないのを、カリカチュール紙に始終からかわれている皇太子だが、このトーンと比べるために、同じ日のポシャド欄の記述をいくつか引いておこう。

「ふかつて、栄光の三日間の1周年記念に際して市民王は、七月の戦士達をバンテオンに集めた。今年は、フォルス、サント・ペラジー両監獄に彼らを集めることだろう。

∴数日前から、モンタリヴェ氏と仲間の料理人たちは、玉葱を大量に買い込んでいる。玉葱は、今月27日の公的涙を容易にするためのものと思われる。

∴ペルシル氏は、倒れた七月の闘士達のために、教会が祈りを捧げるよう求めている。生者の方が遥かにそれを必要としているように、我々には思えるのだが。」

この時期の文章には、Alt, Alta..., Roche... といった署名が頻繁に現れるが、いずれも、後に詩人として有名になる アルタロッシュ (Altaroche) のこと。例えば、121号 (1833年2月28日) の彼の記事には、次のようなものものしいタイトルがついている。

「その国の王の子供、とりわけ娘達の数の多さから、その国にとって生じ得る無数の利得の一つについて」

つまりアルタロッシュは、即位以来ルイ・フィリップ攻撃の常套手段の一つとなっていた子沢山、それによってかさむ皇室費、王の人並はずれた金銭欲 (と反対陣営が言っていたもの) を取り上げているわけだが、彼の意地の悪い文体は、次のような出だしからも推測されるだろう。

「ある者達の目に、ルイ・フィリップが金銭を愛しているように (これはつまるところ、悪徳であるよりもむしろ美德ではないか) 見えるにしても、これはひとえに、家族を思つてのことなのだ。父の愛は、どんな場合でも、測り知れないほど大きい...」

初期、中期に続いて編集長のデノワイエも、デルヴィルのペンネームで、あい変わらず長い文章を書き続ける。

128号 (1833年4月18日) には、グランヴィルの彩色石版画「剥製動物自然博物館」(Cabinet d'histoire naturelle) が載っているが、そのプランシュ (版画説明文) は、3ページにぎっしり詰まったデノワイエの文章である。

鍋釜を叩いてのシャリヴァリを思わせる、騒々しい導入「音楽」がすむと、案内人の声が鳴り響く。

「ささ... お入り下され、紳士淑女方！今こそ決定的瞬間でございます。中にあるのは他でもない、地上最強の君主、祖国救助の勲功故、レジオン・ドヌール勲章の榮譽に輝く、フランス人の王所有するところの大動物園でございます。世界の四つの部分をくまなく旅してこられた方々の言葉によれば、ヨーロッパ中をあちこち移動するこの種のものとしては — 動物園のことを言っているのですが — そのユニークなこと、他に例はございません。」

終わりの方で、「動物園のことを言っている」とわざわざ断っているのは、大革命時代のルイ・フィリップの亡命、或いは、そのころのフランス各地訪問をあてこすっているのだろう。

更に呼び入れ口上が延々と続き、再び例の音楽があつて、いよいよ陳列動物の説明が始まる。見物人が最初に目にするのは、学名バルトルス・カメレオ、かつて、王政復古期にはカルボナリ党員として、自由のために戦ったバルト、現在は法務大臣として言論活動その他の規制の指揮をとっているバルトで、自在に色が変わるカメレオンにふさわしい。次いで、大蛇の姿をした政府よりの新聞ジュルナル・デ・デバ、鰐の姿のスルト首相、兼陸軍大臣、古典主義文学者エティエンヌ... 次々とカリカチュール紙の読者にはお馴染みの政治家達が現れる。グランヴィルのグロテスクな絵を強調する文章である。グランヴィルとデノワイエの協力は、この後、131号 (1833年5月9日)、133号 (5月23日) と同じ調子で続いていく。

ドーミエの版画で名高い「トランスノナン街の虐殺」があつたのは、この「博物館見学」から約1年後のことだが、この事件を報じる記事 (180号の冒頭：1834年4月17日) は、カリカチュール紙としては、例外的と言つていいほどの、生真面目さに貫かれている。

「1週間前から、我々の不幸なフランスの殆ど到るところで、瓦礫の山と化したリヨンで、...パ

りで、血が再び街頭を赤く染めた。そこで起きていること...それは余りに恐ろしいことなので、カリカチュール紙は、殆ど自らの特殊な性質、つまり週刊新聞だということが、日刊紙である仲間とは違って、事件の報道を免除、と言うより禁じるのを喜んでさえいる。カリカチュール紙はこの陰惨な時代をすべて写す歴史であると言った人々がいた。その通り。但し、すべてと言っても、人命虐殺は含まない。本紙の鉛筆は、血を嫌悪するのだ。かくもおどましいページを然るべく書き記すためには、その血に自らをひたさなくてはならない。

しかし、かくもいたましい事件の中で、カリカチュール紙が描くことを止めねばならなかったのは、それだけではない。現今の状況では、滑稽は似合わず、嘲笑も充分ではない。それ故、カリカチュール紙は、いつもの規則正しさに例外を設け、発行を24時間遅らせることにした。この措置を、読者諸氏の認められんことを。本紙発行を告げる鈴の音は、内乱の響きと和音を奏することはできなかったであろうから。」

これは、風刺活動の限界を、正直に告白した文章ではないだろうか。むろん、だからと言って、カリカチュール紙の執筆陣が、一斉にペンを取るのを止めたわけではない。むしろ逆に、政府攻撃の調子はますます激しさを増していく。

最後に、不条理のファルスとでも言えるような文章を、ひとつ見ておこう。246号(1835年7月23日)冒頭のデノワイエの記事「想像の上で暗殺された者」(L'Assassiné Imaginaire)である。

「ペルシャの王： や、よく来てくれた。何を今までしていたのかね？」

医師： 庶民の男を一人、肋骨を元に戻し、頭蓋を修復しておりましたもので。確か、第57警察の警官が、棍棒で散々痛めつけました者で。いや全く、恐ろしい暗殺と申してよろしいでしょう。

王： 暗殺だと？ 庶民の者が、図々しくも暗殺などされたと？ 恐ろしいことだ。

医師： でございますよう。

王： うん、まさにその通りじゃ。一介の貧乏人が！ 土百姓が！ 暗殺されるとは！ これは王の特権の横領ではないか！ (...) 嘆かわしい事態だ！ 司法大臣が愚かでなければ、その男を訴追する筈なのだが。

医師： 誰をでございます？ 暗殺者を？

王： 暗殺された者をじゃ。

医師： ご安心下さい。そのことなら、もうすんでおります。(...) 市民と警察の衝突に際しま

しては、悪いのはいつも市民の方、ことに、市民に理があります場合には。なぜと申して、正しい市民は、間違っていないという間違いを犯してやるわけでございますから。許し難いことでございます。」

VII カリカチュール紙の文章の風刺の対象と手段

それぞれの時期の文章をいくつか読みながら、それが、何を、誰を、笑い、批判、攻撃しようとしているかについても、自ずと触れてはきたが、ここで改めてまとめておこう。

最初期で取り上げられた医師、阿片に溺れた文学者、上流階層の犯罪者、高位の聖職者などを除けば、その時々政界の中心人物が、攻撃対象として圧倒的に多いのは当然だろう。革命以前からルイ・フィリップの私的顧問のような役を果たしてきたアンドレ・デュパン、1831年3月のカジミール・ペリエ内閣成立以後は、それぞれの内閣の閣僚達、そして誰よりも、国王自身がターゲットになる。

彼らの何が批判されるのか。それはまずなによりも、彼らの、「変節」として、「裏切り」として、フィリポン達の目に映った態度である。七月革命は、15年間続いてきたブルボン復活王朝の政治がますます保守化し、ついにシャルル10世が7月25日に出した勅令によってその傾向が頂点に達した時、それに対する反動として起こったと言える(少なくとも直接の契機としては)。従って、その結果生まれた新しい政権は、共和制的理念、特に自由への欲求を高く掲げるものだった。王政復古期を通じて、例えば、弁護士としての法廷活動を通じて、反政府的立場を取ってきた人々が、新しい政府で高い地位に就いたのは当然だった。そしてこの新しい政府が、安定を、秩序を得ようとする時、この動きはやがて、反動化、保守化、裏切りとして、いくつかの新聞の目に映ったのである。この、裏切られたという感覚、「約束が違うのじゃない」という気持ち、それが石版画にせよ、文章にせよ、カリカチュール紙のすべてを動かす原動力となっていると言っても、過言ではあるまい。

「約束違反である秩序」を樹立し、強固なものとするのに力を尽くす、閣僚、国王は、むろん、さまざまな人間によって支えられている。皇太子、妃、王の姉アデライドをはじめとする国王一家、下院議員、特に、内閣の要求するままに議案に対して投票する中央派の議員達、国事犯罪に関しては裁判所の役も引き受ける貴族院、言論規制の中心となる検事総長ペルシル、歴代のパリ警視総監ヴィヴィアン、ジスケ、街頭での反政府運動取り締まりの指揮を取る国民軍総司令官ロボー元帥、また、彼らを言論の

面から支えるジュルナル・デ・デバ、モニターと
いった新聞、それと、知らぬ間に、しかも熱狂的に、
新政権を支えることとなっている、主として中産階
層の人々、こういった人々の中の誰かが、もしくは
何人かが、入れ代わり立ち代わりカリカチュール紙
上には登場した。

むろん、取り上げられるのが、その時々的事件と
の絡みであることも多かった。1830年末の、元
大臣達に対する裁判、判決、31年5月のヴァンド
ーム広場での示威運動に対する散水器を用いたロボ
ー元帥による取り締まり、同年末、リヨンで起きた
絹織物労働者たちによる動乱に対する軍隊を投入し
ての鎮圧、32年6月のパリ市戒厳令、33年6月、
ベリー公爵夫人に対する超法規的措置、34年4月、
リヨン、パリをはじめフランス各地で起こった動乱
と、翌年にかけて大々的に行われた貴族院法廷によ
る裁判... またこうした「その時々的事件」と並ん
で、繰り返された、もしくは、底流のように常時存
在した傾向、政策 — 例えば、街頭運動取り締まり
のための民衆の雇入れ、閣僚達による、遠隔腕木信
号を利用しての株操作、また言うまでもなく、カリ
カチュール紙自身が始終その犠牲となった差し押さ
え、裁判の繰り返し、等々 —、カリカチュール紙の
取り上げなかった状況があるのだろうかと思いたく
なるほどだ。

では、カリカチュール紙はどのような手段で、こ
うした対象を批判し、笑おうとしたのだろうか。繰
り返し現れる、文章上の特徴を挙げてみよう。

i) 履行されなかった約束条項の確認: 「約束が違
うのじゃない」というための一つの手段は、約束し
たことを改めて持ち出し、現実との距離を相手に自
ずと確認させることである。「憲章は実現し、真理
となるだろう」(La Charte sera une vérité) という、ル
イ・フィリップが王位に就く前に誓言として言った
言葉をはじめとして、「パリ市庁舎での政策綱領」
(Programme de l'Hôtel de Ville)、「七月の太陽」(Le Soleil
de juillet)、「27、28、29」、といった表現が文
中に散りばめられるだけでなく、多くの石版画にも、
意地悪く記されている³⁴⁾。

ii) 身体的欠陥／特徴の誇張: 古くから風刺画で
しばしば用いられる技法で³⁵⁾、カリカチュール紙の
場合も、ドーミエによる肖像漫画で顕著だが、文章
中にも多用されている。長く法務大臣を務めたバル
トの斜視、言論取り締まりの一方の中心だったダル
グーの大きな鼻、小柄なチエール、そうしたものが、
現在の我々には奇異な感を抱かせるほど、繰り返し
現れる。人間の身体、容貌の特徴が、内面を表すとい
う当時の観相学上の考えが、影響しているのだろ
うか。

身体上の欠陥と同様に、例えば、リエゾンや綴り
字の誤りがあげつらわれる場合もある。文部大臣を

務めたジロ・ド・ラン (Girod de l'Ain)、宮内庁長官
のような役についていたモンタリヴェ (Montalivet)
のような場合がそれだ。また、ルイ・フィリップ自
身、演説でいつも同じことしか言わない — しかも
接続詞の que をやたらに使って — と、馬鹿にされ
る。

iii) 本名でなく綽名の使用: 人を綽名で呼ぶ目的
は、さまざまに考えられる。それによって、彼を仲
間内の人間とすることもあるし、逆に、排除の印と
することもあるだろう。もっとも、この「仲間内、
排除」という言葉自体、そうはっきりした境界があ
るわけではない。むしろ、排除しながら仲間内に入
れておく、あるいは、仲間内に入れることで排除す
る、といったケースの多いことは、我々自身の身の
回りに見られることである。また、綽名の使用は、ii)
で扱った「身体上の特徴の誇張」の延長と言える場
合もあるし、時には、敵の目をくらます一種の暗号
として機能することもある。

カリカチュール紙で綽名で呼ばれることがもっ
とも多いのは、おそらく、ルイ・フィリップ自身だろ
う。例えば、比較的早い時期、彼は「8月9日」(Le Neuf
Août) と呼ばれた。これは、1830年7月29日
に、「王国国事一般代理人」(Lieutenant général du
royaume) の地位にとりあえず就いた彼が、新しい憲
章を基本とする立憲君主国の正式な王として認めら
れた日付で、1年後にわざわざこの数字で彼を呼ぶ
ということは、当初の理念と現実との差異を確認さ
せることに他ならない。

ルイ・フィリップに与えられた呼び名をいくつか
列挙しておこう。「バリケードの王」(roi des
barricades)、「市民王」(Roi-Citoyen)、「秩序」(l'Ordre
des choses)、「けちんぼ」(l'Avare)、「アルパゴン」
(Harpagon) 等々... 中期以降の石版画で、国王を真
正面から避けるようになったのに呼応して、綽名の
使用は次第に頻繁になっていく。また、Chose、
Quelqu'un といった内容が定かでない言葉で彼を指す
場合もあったし、洋梨の絵が到るところに現れるよ
うになってからは、「poire」という言葉自体が使われ
たのはむろんである。

国王自身に次いで、多くの呼び名を与えられたの
は、皇太子オルレアン公だろう。正統王朝主義のサ
ロンで、「篡奪者」の世継ぎを馬鹿にして呼んだ呼
び名をそのまま受け継いだものらしい「坊や」(Grand
Poulot)、リヨン動乱、アントワーペン攻略戦での行
動を皮肉った「勇名轟く武人」(Le plus illustre des
militaires du monde) とか、政府寄りの新聞が、リヨ
ン動乱の後で彼に与えた「虹」(L'arc-en-ciel) などが
それだ³⁶⁾。

有力政治家、軍人の中で、綽名で呼ばれることの
最も多かったのは、ラファイエットの後を受けて国
民軍司令官に任命されたロボー元帥だろう。既に述
べた如く、彼は1831年5月、ヴァンドーム広場

での街頭示威運動を、群衆に向かって水を撒くことで取り締まった。火器その他の武器を用いるよりは、遥かに穏やかだとも思われるのだが、カリカチュール紙は、それを決して許さなかった。それ以後彼は、画面の上では必ず巨大な「浣腸器」を持たされるし、文章では、「三叉の矛を持つ美貌の海神ネプチューン」(le beau Neptune (qui) tient son trident) とか、「ランスロー」(Lancelot) (聖杯伝説に登場する騎士：発音が、『水を投げる』(lance l'eau)に通じる) とか呼ばれる。ギゾーは、「ヘントの旅人」(Le voyageur de Gand) などと呼ばれて、ナポレオンの百日天下をヘントへ逃れたルイ 18 世への忠誠心を喚起させられる。アンドレ・デュパンが、フランスを革命の混乱から救った「救世主」(Sauveur) と呼ばれるのは、事態が収拾されるまで表に出ようとしなかったと言われる、革命の際の彼の臆病さを皮肉ったものである。純粋な綽名とは少し違うが、タレーランを「オータンの司教」(Évêque d'Autun) と、また、首相、陸軍大臣を務めたスルト元帥を「ダルマティア公」と以前の、もしくはふだん余り用いられない称号でわざわざ呼ぶのは、その変節の激しさを示すためである。また、語呂合わせから、検事総長のペルシル (Persil) は、「鋸親父」(Père-scie)と、予審判事ザンジャコミ (Zanjacomi) は、「デジャコミック」(Déjà-comique もう滑稽) と呼ばれたりした。

iv) 言葉の遊び、語呂合わせ：風刺文でしばしば用いられるこの技法は、カリカチュール紙の文章にも頻繁に現れる。例えば、29号 (1831年5月19日) はボシャド欄にかなりの紙面を割き、更にそのかなりの行数を、上で触れたヴァンドーム広場での散水に当てている。そのいくつかを拾ってみよう。

「ロボー伯爵は、近々司法大臣に任命される予定である。(司法大臣 garde des sceaux は、水桶の番人 garde des seaux と同じ発音) / 国家という船は浸水している。(faire eau は、逐語的には『水を作る』だが、熟語としては、『浸水する、危態に瀕する』) / カジミール・ポンピエ氏の顔色がこんなにいいのは、浣腸器を用いているからである。(時の首相、カジミール・ペリエ Casimir-Périer がいつのまにか、ポンプを使う Pompier に変えられている)」

少し趣を変えた言葉遊びとしては、99号 (1832年9月27日) に、「新しい下院議場での木魂とダルグー氏の鼻」と題された、デノワイエの文章がある。今その概要だけを述べれば、次のようになる。新しい議場で議員が演説をすると、その最後の言葉が木魂となって跳ね返ってくる。但し、少しづつ意味を変えて。例えば、バルトの口を出た「必要な qu'il lui faut」は、「嘘っぱちの faux」に、スルトの「文民の civil」は、「卑しい vil」に変わってしまう。

その秘密は、演壇正面の大臣席に座ったダルグーの巨大な鼻の共鳴だった。言葉の変化は、むしろ単純なものと言えるだろう。

次の二つの例も、一見手が込んでいるように見えるが、単純なものである。71号 (1832年3月8日)、77号 (4月19日) の、いずれもスケッチ欄をうめる表の形を取っている。

前者は、「中道政治の棚卸し / 内務省保存の拾得物、それぞれ以下のように評価されている」とタイトルを与えられ、「フランス...A.B.C. / その力...F.A.C. / 内閣...A.Q.」といった具合に、アルファベットだけで評価が与えられている。言うまでもなく、それぞれ、abaissée (下落した)、effacée (消された)、à cul (進退谷つた) と置き換えることができる。「拾得物」の数は、全部で25個にのぼる。

後者は、有力政治家らの住所録で、例えば、「ある人」(つまり王) は、Rue de la Monnaie (造幣局通り / カリカチュール紙は、いつも王の金銭への執着を批判していた) に、「文部大臣」は Rue Sainte-Anne (聖アンヌ通り / Anne が連想させる âne=ロバ、無知、馬鹿、でモンタリヴェをからかったものだろう)、「公共工事大臣」は Rue de l'Egout (下水通り / d'Argout からの音の連想だろう) といった具合で、全部で42項目ある最後には、カリカチュール紙自身の住所として、Rue des Frondeurs (反逆者 / フロンド党通り) があがっている。

v) パロディー：風刺画としてよく用いられるパロディーの技法は、カリカチュール紙の石版画にもしばしば見られるが³⁷⁾、文章の上でも時折り用いられている。大革命時代に流行した歌、「カルマニョル」をもじった「新カルマニョル」(37号、1831年7月14日)、17世紀の滑稽詩「ヴェル・ヴェール」をもじった「お城のヴェル・ヴェール」(228号、1835年3月19日)、王政復古期に流行した「カデ・ブトゥ」の形式を借りた「怪物貴族院法廷でのカデ・ブトゥ」(235号、5月7日) などがそれである。また、88号 (1832年7月12日) の冒頭の文章は、司法大臣バルトが、検事達に当てた回状という公文書の形式を借りているが、これも一種のパロディーと言えよう。

VIII. カリカチュール紙の廃刊

1835年7月28日、革命記念日のいつもの行事である国民軍閲兵の途中、コルシカ島出身のフィエスキによる、国王暗殺未遂事件が起きた。国王と彼に付き添っていた3人の王子は無事だったが、かつて首相を務めたこともあるモルティエ元帥を含む18人の死傷者が出た。そしてこの事件を、単なるテロリストによる国王襲撃事件と言うより、七月革命後、ほどなくして始まった反政府陣営新聞の、王家、政府に対する激しい攻撃の結果であると考えた

政府は、直ちに議会を召集、言論規制の法案を提出、一ヶ月後にはそれを可決させることに成功する。その結果、多くの新聞が、新たに設けられた莫大な保証金制度、事前検閲制度等によって、物理的に生存を不可能にされ、消滅、もしくは、大幅な方向転換を迫られることになる。カリカチュール紙もその一つとして、4年10カ月の命を自ら閉じることになる。以下で我々は、この廃刊の過程を眺め、本稿の結論に変えたいと思う。

毎週木曜日に刊行されていたカリカチュール紙は、1835年の7月23日、木曜日に、予定通り246号を刊行した。ルイ・フィリップ政府によるスペイン干渉、共和派に対する弾圧をそれぞれ風刺する2枚の石版画、「週間小幻灯」、「ボシャド」、巻末の半ページ以上を埋める広告... いつもと同じ紙面構成である。只、強いて言えば、冒頭のデノワイエの文章が、君主の暗殺未遂をテーマにした笑劇であり³⁸⁾、後から考えれば、「なんでこの時期にこんなものを」という感を否めないし、また、フィリポンによるブランシュ欄が異常に長く、242号(1835年6月25日)のブランシュ欄を引き継ぐ形で、幼い二人の女の子に、童話を話して聞かせるという珍しい形式をとって、しかも、その文章自体がいつものフィリポンに見られない感傷的な調子で綴られている³⁹⁾といった点で、それまでの号とは、多少の違いを感じさせたくらいのものである。

それが、次の247号からは様相が一変する。この号は、1835年7月30日に出る筈であり、我々の手元にあるものも、その日付けをつけている。しかし実際にそれがいつ刊行されたかを、確定することはできない。

冒頭の記事、「購読者の皆さんへ」(A Nos Abonnés)には、「7月28日に起きたフィエスキ事件の結果、殆どすべての新聞に対して措置が取られた。カリカチュール紙も、石版画、記事、すべてを変えなければ差し押さえ必至であり、その作業のために、予定の7月30日刊行は不可能だった」とある。果たして本当に、247号は内容を変えられたのだろうか。

いくつかの理由から、実際に内容の変更があったと推測される。第一に、「購読者の皆さんへ」のすぐ次に載っている文章《Il ne leur manquera plus que de ficher son claque》⁴⁰⁾は、政府が議会に提出した言論統制強化のための法案が、いかに憲章に反した悪法であるかを、条項毎に、躍起になって説いているもので、従ってこの法案の審議のために議会が召集された8月4日以降に書かれている筈である⁴¹⁾。

第二に、皮肉なタイトル「有益な厳正さ」をつけられた文章では、「この間の火曜日、7月28日に起きた事件の結果追及された新聞人」の中にフィリポン、デノワイエ、アルタロッシュも入ると告げている。また、巻末の文章は、毎年革命記念日に行われる国王による国民軍閲兵の「人気のなさ」をテ-

マにしているが、なにか急いで綴られた印象を与える。前号まであったボシャド欄は見当たらない。

石版画はどうだろうか。ドーミエの描いた3人の政治家の肖像で、うち二人は「四月事件裁判担当の判事」、つまり、貴族院議員である。この時期には、前年4月にフランス各地で起きた騒乱の裁判が進行中で人々の関心を集めていたから、シャリヴァリ紙が、若い被告達の肖像をしばしば載せていたのに対して、カリカチュール紙では、ドーミエの描いた老年判事達の肖像を載せることが多かった。貴族院の老議員達は、いかにグロテスクに描こうと、政府の怒りをさして買わないことが実験済みだったのではあるまいか。さらに面白いのは、3人の肖像の真ん中で、ロベール・マケールの姿をして威張って立っているティエールの肖像が、「ある若い英雄の」、つまり、皇太子オルレアン公の「作と考えられている」として載っていることである。

もっとも、この間の事情はやや不鮮明で、ブランシュ欄には、「この絵のアイデアはボンサンス紙によって英雄に提供され、その形は本紙でしばしば絵筆を取るドーミエから与えられた。だからと言って、これがかの英雄の手になる風刺画であることには変わらない」という記述が見られる。いったいどういう意味なのか。恐らくは、とにかく、オルレアン公が関係している絵である以上、押収されるようなことはあるまいという、フィリポン側の作戦だろう。ブランシュ欄がさらに、「我々はいずれ、このような、作者の定かならぬ風刺画で我慢して貰う代償として、現在制作中の傑作風刺画を読者諸氏に進呈するつもりである。但し、現今の痛ましい状況が治まり、風刺画を人目につかぬよう保存する必要もなくなった時に」とことわっているのも、この号の石版画が、本来予定されていたものとは違うことを証拠立ててはいないだろうか。

それにしても、247号はいつ刊行されたのだろうか。冒頭の記事「購読者の皆さんへ」は、さらに続けて言う。

「我々は今ようやく、沈黙を破る。不謹慎のそしりを受けることなく、そうすることができるからだ。我々は、ごく近日中に8月6日号を、そのまたすぐ後に、8月13日号を出す予定である。かくて来週末には、我々の刊行物はいつもの規則正しさを取り戻し、刊行予定日と実際の刊行日との間に喰い違いはなくなるはずである。」

「近日中」とか、「すぐ後に」といった曖昧な表現のため、余りはっきりはしないが、「来週末には」8月20日号(250号)が出る予定とすれば、今は8月10日頃ということになるだろうか。いずれにせよ、事前検閲(censure)を含めた言論規制の、格段に強まる法律案は既に政府によって議会に提出され

だが、まだその本格的な審議は始まっていないのだろう。冒頭文の最後は、「いくらなんでも、こんなにひどい悪法が可決されるとは思えない。だから、はっきり議会で可決されるまでは、なんとしてでも我々は、今まで通り戦うつもりだ」と宣言する。「万一、政府の思惑通り、検閲を含めた法案が成立すれば致し方ない、カリカチュールは廃刊としよう」と考えながら、それでもまだ希望を捨ててはいないのが、カリカチュール紙のこの時期の姿勢と言えるだろう。

本来なら8月6日、木曜日に出る筈だった248号はいつ刊行されたのだろうか。内容から見ると、下院議会では、言論規制法案の審議が始まっているようだ。法案以上にもっと厳しい態度を取るべきだと主張する議員達の名前 (Madier-Monjau, Renouard, Duchâtel) が挙がっていることからそれはわかる。議会での審議は、8月13日から29日迄行われたというから、247号の記述と合わせて、15日頃ということになるだろうか。文章は、殆どすべて、法案の分析に、また、それが王政復古期のいくつかの法律に比べても劣らない悪法であることの主張に当てられている。さらに、前号ではまだ見られなかった罵りの言葉 (crétins, buses, foutriquets, olibrius) が、閣僚達や、法案に賛成する議員達に対して使われているのも、形勢の悪化からくる、カリカチュール側の苛立ちの現れだろうか。石版画は、差し押さえの可能制の少ない、貴族院法廷の判事達3人の肖像 (ドーミエ) に当てられている。ボシャド欄はもうない。

249号は、前号のブランシュ欄中の記述によれば、「今度の日曜日に刊行予定」とあった。8月23日に出たのだろうか。只、巻末の記事「神意からの手紙」の発信は、「天から。1835年8月25日」となっているから、もっと後のことかもしれない。「地獄法の死体解剖／第3回」⁴²⁾として、下院での法案報告者ソーゼの報告が転載されている。それによれば、法案には、さらに強力な規制が加えられそうな気配である。

石版画としては、1枚は、あい変わらず四月事件裁判判事の肖像 (Lannes) だが、もう1枚は、久しぶりに肖像ではない風刺画が載っている。後ろ姿の高位の聖職者 — ブランシュ欄によればパリ大司教 — が、敬虔な様子で膝まづいている信者達 — 顔を見ると、ティエールやペルシル達である — にお説教をしている。絵の下には、「迷える小羊達よ、神の家に帰りなさい」とある。王政復古期に王権と結びついていたカトリック教会が、再び政治的な勢力を取り戻しつつあるというわけだ。

カリカチュール紙が、正式に廃刊宣言をするのは、250号においてである。購読者に宛てた宣言文の

筆者はまず、法案の審議の過程で、かつての己の信条に忠実に、堂々と反対意見を述べた13人の議員の名前を挙げ、彼らの良心と勇気を称える。それから、「検閲の復活した今、自分は殺された。しかし敗北したのではない」ことを強調し、「今度の木曜日には、カリカチュールの埋葬を行う」と言う。

その際面白いのは、まだ契約期間が残っている人に対しては、日刊紙シャリヴァリを同じ期間だけ送ることだ。さらに、新たな法律によって強要される保証金も、カリカチュール紙の分をシャリヴァリに廻すことで調達できると言う。「カリカチュール紙は、後継ぎのシャリヴァリ紙の中で生き続ける」というわけである。

石版画の1枚は、四月裁判判事の肖像 (Siméon) だが、もう1枚は「ソーゼ式時限爆弾」と題された傑作である。三色旗の羽ばたく国会議事堂の軒に、無数の銃口が並んでいる。そこから広場の群衆に飛んでくるのは、言論、集会、その他の自由を束縛するための無数の法規制である。襲撃を受けた群衆はひとたまりもない。自由女神、フランス女神の石像も倒れかかり、親指を鼻に当てて愚弄の仕草をしているシャリヴァリも、弾丸をよけるのに忙しい。カリカチュールと書いたたすきを掛けた道化が、地べたに横たわって息絶えている。すぐ横には、ちぎれた彼の前腕が、まだペンを握ったまま、大きな紙になにかを書いている。最後の文章に署名でもしているのだろうか。

250号を、カリカチュール紙の終刊宣言号とすれば、そこで述べられているように、251号はカリカチュールの埋葬号ということになる。

「4年10ヶ月の命を終えて、今、カリカチュールは、検閲を復活させた法の下に倒れた。『検閲は永遠に復活されないだろう』とうたった、あの実現された憲章の、あの条項に基づいて、検閲を復活させた法の下で。」

カリカチュール紙の購読者にとってはおなじみの反語が響いた後で、とうとう成立した法律を⁴³⁾、条項毎に反対議員の意見をつけて挙げていく。残された紙面を最大限に活用するため、小さな活字が用いられる。中でも、版画、陪審制度、演劇に関する条項は、「七月革命のその他の成果=果実 (fruits)」として、洋梨の形に活字が組まれている⁴⁴⁾。最後のページでは、ギゾー、ティエール等、法案成立を推進した主だった閣僚達、また、ルイ・フィリップ自身が、かつていろいろな機会に述べた言説が挙げられ、改めて現在の彼らの「変節」が明らかにされる。

いつも通りつけられた2枚の石版画の内、1枚は、ドーミエによる四月事件裁判判事シリーズで、プラ

ンシュ欄には、「これで、残念ながら、エジプトのミイラ博物館と競り合って開設した骨董品博物館も幕を閉じる」とある。

もう1枚もドーミエの作だが、こちらはよく知られている。ブランシュ欄の説明文の訳だけを挙げておこう。

「...それから、一方で響く銃声の音に、また他方で聞こえる祈りの歌声に、七月の死者達は、一瞬、彼らの頭上の墓石を持ち上げてみた。

そして彼らは眺めた。

そして彼らには見えた。

そして、不幸な祖国で何が起きているかを見た彼らは、七月革命以来、僅かな時しか経っていないのに、かくも異なる情景に、ひどく驚かされた。

そして彼らは怒りを覚えた。

そして、怒りを覚えた彼らは、叫んだ。『いや、はや、これでどうやら、命を捨てた甲斐があったと言うもんだ』

そしてそれだけ言うと、彼らはもうなにも言わなかった。そして苦い気持ちで墓に戻った。もう嫌気がさして、また、新しいスパイ達を恐れて。」

最後に、251号の紙面が、ラムネーの「一信仰者の言葉」からの引用で終わっていることを指摘しておこう。「...冬の厳しさの後で、神 (la Providence) はもっとおだやかな季節をもたらす。...今は人間が裁き、罰している。やがて、裁くのは神となろう。...あなた達 (ラムネーは民衆に向かって書いている) のために十字架につけられたキリストは、あなた達を救うと約束した。その約束を信じなさい...」

カトリック教を国家権力から切り離し、「神と自由」と叫んだラムネーのこの本は、2ヶ月前にローマ教皇によって、禁書の処分を受けていたものである。

終わりに： カリカチュール紙の紹介、一応これで筆を置くが、まだまだ調べるべきこと、言及すべきことが残っているのはむろんだ。フィリポンはじめ、執筆者、画家達がそれぞれどんな人間だったかといった問題は別としても、例えば、当時の他の新聞との協調、対立といった関係も明確にされねばならないだろう。また、フランス、広くはヨーロッパの歴史にあって、「風刺」がどのように行われてきたか、その大きな流れの中で、カリカチュール紙がどのように位置づけられるかを知らねばならない。しかしこれは改めての仕事とし、今回は、「ラ・カリカチュール」と呼ばれたある新聞に現れた石版画、文章を、急ぎ足にせよ一通り眺めたという所で、けりをつけることにしよう。

注

- 1) むろんこの区分は絶対的なものではなく、一応の目安である。とりわけ、それぞれの時期の境界の前後は、前後どちらに入れてもいい場合が多い。
- 2) 四つのペンネームとは、Alfred Coudreux / Le Comte Alex. de B.... / Henri B..... / Eugène Morisseau である。
- 3) プレイアード版、《Balzac, Œuvres Diverses II, 1996》(以下では、OD II と略) の編者の意見でもある。なお、バルザックとカリカチュール紙との関わりについては、主としてこの本を参照した。
- 4) 『「ラ・カリカチュール」とはどんな新聞か(1/2)』(以下では、1/2 と略) p.57 参照。
- 5) むろん文章のことだが、以下では、「風刺画」と訳す場合もある。
- 6) 1/2, p.59 参照。
- 7) OD II, p.1594 参照。
- 8) 14号のこの欄は、後に出された目録では、Carillon と呼ばれている。これは、一時期シャリヴァリ紙が類似の項目に与えた呼び名でもある。
- 9) 「新年の贈り物」の趣向は、文章でも、石版画でも、毎年のようにとり上げられる。
- 10) OD II, p.1597 参照。
- 11) 4) 後期で挙げた例参照。ポシャド欄一般については、稿を改めることとする。
- 12) 特に、《Thureau-Dangin, Histoire de la Monarchie de Juillet Livre 1^{re}, Chap. IV, II》(初版 1884、第二版 1887) 参照。
- 13) カリカチュール紙自身の記事によれば、月曜日には、刊行の準備ができていたらしい。
- 14) 1/2, p.59 参照。
- 15) 厳密には、12号(1月20日)の Bellangé の石版画と幻想欄も連動している。
- 16) 1/2, p.60 参照。なお、1/2 では、この版画の発売、差し押さえを、「3月初め」としたが、「2月終わり頃」とすべきだろう。
- 17) OD II, p.1598 参照。
- 18) 時期としては、中期に入れることもできる。
- 19) 1/2, p.61 参照。
- 20) 40号(8月4日)でも、簡単な紹介が行われている。
- 21) 不公正な勲章授与は、例えば、26、32、33各号の石版画のテーマとなっている。「ネメジス」については、1/2, p.55 も参照。
- 22) 1/2, p.55 参照。
- 23) これ迄我々が引いた文章も、多くは Derville のサインがある(39、43、59、63各号記載のもの)。

- 24) 1/2, p.54 参照。
- 25) 1/2, p.60-61 参照。
- 26) 1/2, p.63,65 (注2) 参照。
- 27) 例えば、63号(1832年1月12日)冒頭の、Derville の文章が、王の尊厳を侵害したとして訴追された(「1832年度の予言／(...)偉大なる喜劇役者フィリップは、フランス劇場で、アルパゴンの役を演じるであろう。彼は観客から散々に野次られ、俳優業をやめざるを得なくなるだろう。」但しこの場合も、同じ号に付いた2枚の石版画といっしょに有罪となっている。
- 28) 例外的に、これ以前にも、バルザックの「あら皮」紹介があった。上記注20参照。
- 29) 但し、「8つ折り版の著作」(ouvrages in-8°)と限定している。231号(1835年4月9日)以降は、「書物、美術作品の別を問わず、3部見本を送れば、カリカチュール、シャリヴァリ両紙で紹介する」という文面が1面のタイトルの上に見られる。
- 30) 本来なら、今後のカリカチュール紙は、絶えずシャリヴァリ紙との関連で検討されるべきだろう。只、目下ところ、特に初めの頃のシャリヴァリ紙の資料が筆者にとって皆無に等しいため、そうした観点からの検討は別の機会に委ねざるを得ない。
- 31) 使用される活字の種類も改めて検討されるべきだろう。
- 32) 226号(1835年3月5日)には、「ボシャド」に似た「悪口」(Cancans)欄が設けられたが、これは次の227号だけで消えてしまった。
- 33) 198号の場合、5行の形容の内3行だけ記せば次のようになる。「いと高く、いと力強い殿ルイ・フィリップ1世、フランス人の王、君主にして寓話作家、己の王国で最も正直な男、あまたのキリスト教的徳に飾られ、また、あまたの幼き子の父親...」。「殿」は seigneur ではなく saigneur と綴られ、ルイ・フィリップが刺絡の術を心得ていたことを暗示している(161号のドーミエの石版画参照)。「寓話作家」(fabuliste)も、彼の綽名の一つ、la Pensée fabuleuse と関係がありそうだ。
- 34) 例えば、35号の石版画。1/2, p.60.
- 35) 還元法と呼ばれる技法。
- 36) はじめ、ある下院議員が、彼のリヨン動乱鎮圧の際の「武勇」を誉め称えて「虹」と呼んだとも言う。他に、Fanfan, prince Rosolin, jeune héros などとも呼ばれた。
- 37) 例えば、81号の「最後の晩餐」(ダ・ヴィンチ)、97号の「ユダの接吻」(ヴァン・ダイク)、171号の「正義と復讐に迫られる罪」(ブリュドン、1/2, p.65 参照)。
- 38) VI の末尾に部分訳がある。
- 39) 242号では Emma、246号では Emma と Liza という少女に語りかけているが、少なくとも Emma はフィリポンの実際の養女だったらしい。この二つの文章は、フィリポンの人となり解きあかす一つの鍵になるかもしれない。シャトーブリアンの「墓の彼方の回想」(第4部、2巻、7)を参照。
- 40) 正式のタイトルは更に、《au bout d'une perche, sur la place publique et de forcer les passants à s'agenouiller devant》と続く。「このままでは、後はもう、シルクハットを竿の先につけて、通行人にその前で膝まづけと無理強いすることになる」とは、問題の法案が、いかに理不尽なものかということだろう。
- 41) Thureau-Dangin 前掲書(上記注12)の2、XII、IIIを参照。言論規制法の審議については、2、XII、IVを参照。
- 42) 《Autopsie cadavérique de la loi infernale (Troisième opération)》。前号では、《Autopsie cadavérique de la machine infernale (Deuxième opération)》、第1回は、前々号の《Il ne leur manquera plus (...)》がそれにあたる。
- 43) 法案審議が終わって、下院で投票が行われたのは、8月29日だった。正式に法律として成立したのは9月に入ってからだろうか、一般に、「九月法」(les Lois de septembre)と呼ばれる。
- 44) 活字を洋梨の形に組むことはカリカチュール紙ではなかったが、1835年5月1日のシャリヴァリ紙の1面に見られる。